特 116
196

淨土宗安心法話

始

特116
196

林隆碩著

淨土宗安心法話

眞聲社發行

大正
11. 10. 4
内交

序

造花が如何に人目を奪ふ程美しうても、それには生々潑溂たる清新味を持たぬから、花の花たる眞價を認むることはできぬ。いかに高遠な、壯大な尊き聖教にしても、夫れが眞實味を離れて居ては、何等の價値を有するものではなからう。吾宗安心談は固より高き、深き幽玄なる教ではない、然れ共これを味へば味ふ程滾々として盡きぬ清新味があり、眞實味が湧き出づるを如實に感じ得らるゝのである。畏友　林隆碩君は布教篤學の士、夙に烈々灼くが如き信念を以て、克く宗風宣揚に努めらる、茲に十數年來の研究と實演とを大成して「淨土宗安心法話」といふ、該博なる智識と精細なる解明とに依て、必ずや本願の眞實味を明かに又强く、現代及將來の社會に傳ふべきを確信して止まぬ。予元より不敏、其器でないが同學の誼を以て、誤て編輯の事に從ふ、猥りに勿々の筆を呵して、敢て大方の諸賢に推稱するものである。

大正十一年九月壹日

桃野春興識

附言

一、本書は開宗七百五十年記念の一として弘く一般宗徒に搬布せんが爲めに發行したるものなり

一、本書の目次、冠頭見出し等は、編者が便宜上隨意に附加し且つ編輯上往々加除せし處ありて、多少文意を損したる點なきにしもあらず、これ皆編者の罪にして、累を著者に及ぼさゞらんことを茲に諒承を仰ぐ

編者識

淨土宗安心法話

目次

序說

其一　精神生活――安心とて別に變りたるものにあらず――浮世は儘にならぬ――安心は眼の前に在る――玉を抱ひて貧裡に迷ふ――磨かされば光なし――演若達多頭を失ふ――不急の事を諍ふ――他力の救濟――酒豪の勞働者――小供の一言禁酒の動機となる――佛陀の一言無明の醉を醒ます。

其二　美作の誕生寺――巡禮の子の純眞なる信仰――德嚴和上――高座から轉落――三途の巷に墜つる愚を戒め玉ふ――造罪の上の廢惡、妄心の上の息妄――生活に卽したる念佛――佛敎は自己反省の敎――空也上人の念佛――口と心にまかす念佛。

本說

第一　佛告阿難――話相手――念佛の聲する處に眞の友集る――引きずる力――汽車の例。

第二　願生彼國者――總安心――厭欣心――厭世敎――一念の願生心――發心の難――三井寺の炎

上――眞實の發心――芝中の火災――少女念佛大往生の話――愚鈍念佛第一の機。

第三 發三種心――別安心――三心――一心――簡易を卑む癖あり――實行難――鼠の會議――一心を細別せば三心となる――一糸を戻せば數糸となる――髮の例――上手に聽くこと――道樂息子の話――罪の迷ひ子を救ひ玉ふ。

第四 一者至誠心

其一 三人塔を廻る喩――解脱上人と明惠上人――修養の二道――自分で修める――相手を求めて修養する――天を相手にする――金や名譽を相手にする――彌陀を相手にする――助け玉への一念が至誠心――牡丹餅流の心得――安心は助け玉への外になし

其二 鮒の喩――離欲――佛樣と差し向ひ――危く欲と差向ひにならんとせし紳士――至誠の態度

其三 誠の有無――應舉幼兒の畫――誠の妙處は一分の處に在り――仔細なき處に仔細をつける――ヒネクレの繼子――眞宗との比較――西山上人の白木念佛――念佛の癖――癖を直す靈藥

第五 二者深心

其一 片輪安心――だまかす狐――深く信する心――疑ひを追ひ遣る老婆――疑にかまはず念佛――明遍僧都と法然上人――强き本願に縋れ

其二 二種の信心――信心とは賴もしき也――後始末――信とはマカス也――信とはもたるゝ也――第一信機――足らぬを物の始めとする藩主――欲の爲めに身を亡したる盜賊――足らぬ事に氣をつけよ――他力信仰の發足点。

其三 織る者進み耕す者退く――聖淨二門と進退――淨土門は後退り――後退りに三種あり――己が罪を自覺せず――一軒家の喩――淨土敎の罪惡觀。

其四 發心の因緣――念死――深岸より墜つるが如し――摑むこと――佛願を摑むを第二信法心といふ。

其五 骨を叩いて泣く(後悔)――蜻蛉の身の上――宿を定むる必要――鶯梅宿(紀貫之娘)――親なし子(叔達の孝)――淨土の宿を求めよ。

其六 理仙行者の別時念佛――不簡擇の大慈悲――種を蒔け――念佛の種を蒔け――掘られぬ用心――異學異見の鳥――ズルケ懈けの鳥――人のけもの――深く植ゑ込むを深心といふ

其七 深心の結論――安心の心配――有田憂宅――表具師の有金憂金――獲信後の態度――熊谷蓮生信後の變化――妄念は止まぬ――西行法師の事――凡夫の地金其儘――往生の至訣

其八 決答疑問鈔の問答――大事にする程心配あり――往生淨土の事は最も大事也――往生淨土の心配――元祖上人得生の心配――貪瞋は强く願生は弱し――他力本願の利益。

第六 三者回向發願心

其一 往生淨土の理想——回向即發願心——身代り本尊——熊野權現の託宣——現世の事を捨つるに非ず——慈惠僧正の發心——稻の喩——不求自得の益——長谷川某の凱旋。

其二 譬說——譬へば溝の如し——譬へば締括りの如し——隨緣の善——念佛者の處世法——譬へば桶の箍の如し——貞極上人と藩士——往生淨土の爲めの回向心也

其三 振向ける心——隨喜善の回向——子守の追善——貧の女供養——佛法心

其四 二種の回向——往想回向中に還想を含む——回向心の不心得——佛の鼻薫ふる事——物は施して無くなるものにあらず——大慈悲——法界回向——極樂往生の爲めの回向

結　勸

其一 四つの佛檀——第一佛檀(厨子の佛檀)——外相不背、內證自熟——亂雜な佛檀——眞純の佛檀——死をもて佛檀を守りし女——第二の佛檀(お寺)

其二 第三の佛檀(總本山知恩院)——有形的佛檀——第四の佛檀(信心の佛檀)——心宮、心殿——要中の要は第四の佛檀——念佛の聲する處心の佛檀あり——善光寺如來——念佛の聲する處は上人の遺跡なり——一向に念佛すべし

淨土宗安心法話

林　隆　碩　述

序　說

其　一

精神生活

何れもよくお參詣くだされました、今席より引續いて、淨土宗の御安心の話をいたします、安心と云ふは、昔より今まで使用しました言葉でありますが、當節の詞でまうせば、精神生活のことであります、最近になりまして、この精神生活の四文字が大分に澤山つかわれるやうになつて、ふたくち目には、ちきに精神生活の高潮だとか充實だとか、隨分と力瘤をゐれて申すやうになりました。

安心とて別に變りしものにあらず

エマーソンといふ人が、人間の幸福は、誠實、眞面目、正しい働き、すべて精神生活の上に求められるものであると說ております、が、今この席で、精神生活と云ふやうな、皆さんに難解の文字や詞を用ゆるのは差しひかへまして、矢張まへより聞なれ耳なれ、云ひなれてゐる安心の方が、適當であると信じます、そしてその方が私にも都合が可いのであります。

淨土宗の安心とまうしたとて、別段變つたことでもなく、また珍談や奇說でもありません、一體、人間といふものは、皆さんでも私でも、雲の上は人も非人乞食も、珍らしいこと、云へば聽かんとし、見んとし手に觸れんとするものであります、これは人間の天性で、善用すれば、發見、進步、向上の土臺になりますが、惡用すれば、それがために浮は調子に流れたり、不眞面目になつたり、事を粗末にするやうになります

お隣の家はお金持

だが世の大底の人は惡用するのであります。

今こゝに、米國から來た珍らしいものがあるとします、隣人や知友に見せびらかして、これは日本にないもので、遠い何千哩向ふのアメリカからの珍品であると誇りますれば、見た人も聞いた人もナーるほど結構なものだ、よいことをせられた、おれも慾しいと百人は百人ともに想ふに違いありますまい。

けれどもこれを反面から靜に考へますれば、かくの如き貴重な珍物が獨り米國にを來て我が日本に產出しないことは甚だ以て悲しむべきことではありませんか、それを爾か思はなくて單に米國特產だ良いものだ珍品だと隨喜する所に、不知しらず日本では出來ない日本は駄目だと、我が足下を輕しめてはおりますまいか、是は甚だ以て慨くべきであります

今一つ申せば、お隣の家は身代者だからお金がたんとある、わしの家

浮世はまゝにならぬ

は常にピーピー、働きはづせば食ひはづす、飯びつは何時もから〳〵、そのくせ小供の餓鬼は捨てるほどある、小供は子寶と云ふが、子寶どころか貧乏寶の骨頂だ子ゆへの貧乏この通り、せめて此子が二三人であつたら、恁した貧乏もあるまいものを、ほんに浮世はまゝならぬ、それに隣は金がづん〳〵殖へる、小供は寡しなんと良い境界だろうねー。

安心は眼の前にある

隣に藏が立てばこちらにや腹がたち

隣は藏が立つ、こちらにや腹がたつ、立つことは一つだが藏と腹との違がある。

お隣に珍品たる金錢がたんとあるのに、我家にないことは甚だ悲しむべきである、人として持つてゐるべきものが、自分にはないと云ふことは殘念な心狹き話しであります。

今もその通り、これよりお話し申す淨土宗の安心は、雲山萬里の遠方の話でもなく、生れて始めて聽く珍說でもありません、御互の眼前にある話であります、眼前と申せば、膝の前や座蒲團の近くにでもあるかと合點せらるゝお方もあらうかと存じますが、外界にあるでなくて、內界にあるのであります、外圍でなくて內圍にあります、お互の胸中をよく〳〵せんさくして見ますれば、何れもみな淨土宗の安心があらねばならぬと云ふのであります、法華經に玉を抱いて貧裡に迷ふとお說になつておりますが、それは遠い三千年前の話でない、お互の日常の立居起臥を自惚なく靜觀しますれば、擧つて皆、玉を抱ひて貧裡に迷ふて居るのでありますが內に佛性がありながら、この佛性の囁を耳にせずに生活に日もこれ足らぬ有樣であります、晃々と輝く佛性のきらめきは、貪瞋煩惱の黑雲に閉ざされて、惜しい慾しい、憎や悲しやと朝夕を送つてゐるのであります、これ寶の持ち腐れではありませんか、これが釋尊の仰せられ

玉を抱いて貧裡に迷ふ

磨かざれば光なし

た、玉を抱いて貧裡に迷への所であります。

玉は御承知の通り磨かざれば光がない「金剛石も磨かずば玉の光は添はざらん、人もみがきて後にこそ誠の道は現はるれ」、昭憲皇太后のみ教の通り、御互の心の玉も磨かねばなりません。

今　法然上人の教により、彌陀如來の願王の力によりて、心の玉を磨きますれば、それが即ち淨土宗の安心であります、信心であります、信仰であります、さきに述べた佛性は信心と現はれ、信心は南無阿彌陀佛とあらはれるのであります。

大信心は佛性なり、佛性即ち南無阿彌陀佛であります。

かような尊い種が遠くにあるのでない、外に在るのでない、他にあるのでない、銘々の心内に宿つてゐるのである、たゞそれが心の奥の奥、心の底の底にあるからして、視悪く、聞悪く、表れ悪いのであります、

演若達多頭を失ふ

それが佛教のみ法に遭ひ、淨土のみ教により、法然上人の御縁に引立てられて、自分としては切瑳琢磨の力はなくとも見佛聞法の増上力に由つて佛性の花開き、此度往生淨土の大慶を享くるのであります。

佛の在世に演若達多とまうす佛弟子がありました、ある朝鏡に對し面を熟視られたところ、どうしたことか自分の頭が見にくかつた、これは餘りに朝寝して眼やにが拂れずに、ぼんやりしてゐたのでせう、それとはしらずに驚いたの演若達多、こりや大變だ頸がない頭がない、これは昨夜、鬼がきて引つこ抜いたに相違ない、おれの壽命ももうこれまでだ頸は全體どこへ飛んだであらう、あの夜鬼め、あまりに無情でないかと狂氣亂心して飛び廻つた。

これを見聞した人も更に驚いた、演若さんにはちやんと頸があるぢやないか、奇麗に剃つた頭も艶やゝしてゐるぢやないか、それに演若さ

不急の事を諍ふ

んは頸がない頭がないと、變んなこともあればあるもの、あれは亂心してゐるのではあるまいか、こに角に一寸と本人に注意してあげよう、もし演若さん、氣を確にして頭を兩手で摑んでごらん、あなたの頭も頸も己前の如く胴の上にちやんとのつかつてゐます、丁度私のように、そらよくごらん、ありませう頸も頭も、お、演若さんお氣が注きまして、と云はれ始めて吾に返つた達多、なるほど有つたわいと、安心したと傳はつております。

まさか佛弟子とたゝにられるお方達に、よもや斯ようなことはありますまい、これは人間の弱點であるところの

世人薄俗にして不急の事を諍ふ

の大缺陥を諷した偶話でありませう。お互は毎日回顧せねばならぬことは反省もせず、急がねばならぬ精神上の安着は餘處にして、第二義第三

他力の救濟

義のことにのみ沒頭しております、恰も一番大事の頭や頸のあるのを忘れて胴體だけで飛廻つてさわぐのと同然であります、それが釋迦牟尼如來や、法然上人の善知識の御注意と大悲に滿ちた手厚きお指導に由りて安心決定の頸や頭を具へつけられて頂くのであります、力の強い善知識の因緣、これがお互の父であり母であり、君であり師であります、これを有力の强緣と申しております、この强緣に縋るのを他力の救濟といふのであります。

酒豪の勞働者

さる所に、大酒飲の勞働者がありました、お酒は百藥の長とかまうしますが、これは大きな間違で、百害の長であります、佛敎は酒を飲まぬと云ふ特色で開かれたのであるが、いつとはなしに變化して僧侶は酒をのむもの、法事や佛事には屹度お酒はあるものゝやうに變りました、これには神道が、神前で御神酒を出す日本古來の習慣が、遂に佛敎の法要

にもおみき式に酒を出すやうになつたのと、他には世間並の社交的の意から酒が用ひらるゝやうになつたものでせうが、これは今迄の迷妄であります、佛教に眼ざめたるものは、斷然こして禁酒すべきであります。

家も田も呑んで後悔する時は
我が衣手に露はぬれつゝ
飲つぶし夜逃をしたるその跡は
唯有明の月ぞのこれる

小供の一言禁酒の動機となる

されども今尚、佛界に於いて酒が、爾かも盛に使用せらるゝことのそれは、長恨の次第であります、この勞働者も御多分に漏れず、大酒黨でありました、女房も困つて常に意見すれども一向に肯入れない、毎晩多量の酒を仰いでゐた、ある晩例の如く徳利を傾むけてゐる横に、四歳の可愛い女の子が「阿父んお酒をよして頂戴私が淋しいから……」

これを聞いた父、變だと思ふたから「阿父さんが酒を飲むのがなぜ淋しい、お父さんがお酒をのめば歌が出る手が鳴る舞が出るほんに陽氣で、却つて賑かいではないか……」すると「お父さんお酒をのむと早く死ぬお父さんが死んだら、わたし淋しいから」――これを聞いた父親は暫く無言であつたが、小供の一言心根に徹し、それが動機で遂に禁酒したそうです。

佛祖の一言無明の酔を醒ます

親を思ふ情に盈ちたこの一言は、實に偉大なる力があります、況んや佛祖の御一言、教誡の詞、皆之れ無明の酒に酔へるお互を醒し救はんと云ふ大願であります、南無阿彌陀佛の稱名は、なんと云ふても、めざめたるの叫聲である、安念より脱れたるの喜悦の響であります。

お互は此念佛に依つて心内の充實と感謝と、そうして躍進とを成就するのであります。

序說

其二

前席は少々長談になりまして誠にすみません。

これより安心の内容に就いてお話をするのですが、一寸その前に思付いたことがある、それをお取次いたします。

美作國久米の南條稻岡村は誰もしる吾祖法然上人の御降誕の地であります、只今では誕生寺となつております。

二幢のあまくだります椋の木は

よゝにくちせぬ法の師のあと

一度は是非參詣をせねばならぬ御靈場であります、宗祖の御遺跡と致しましては廿五靈場あります、どれもこれも皆大事な御芳蹟でありますが就中美作の誕生寺の如きは、本山に續いての要中の要の靈跡であります

美作の誕生寺

今や開宗七百五十年を目前に控へて記念の法要を邀ねんとしてゐる際には、一段と誕生寺の戀しさなつかしさが增さるゝのであります。

皆さんは昔の芝居や小說に巡禮の出るのを御記憶でせう、近くは阿波の鳴門の巡禮はどうでせう、餘處の小供のするように、二人が仲にそひ寢して、父よ母よと叫びたさに

父母のめぐみもふかき紛川寺

佛の誓たのもしきかな

巡禮の子の純眞な信仰

の御詠歌を流しながら、殊勝に巡禮する少女の姿をみるときは、あの純眞な信仰火山のような熱烈な思戀、佛の誓に全身を任かせて雨にうたれ風にさらされ或は野に伏し山に起き門邊に佇んでは火にほゐつけられても、尙父やこひし母こひし、戀し戀しの一念にて佛の御名を稱へつゝ、疲れ切つた足を前に歩ます、あの巡禮の姿を見ましては、私は泣かずに

はおれぬ涙を拭はずにおれません、あゝ昔は純乎たる信仰に生きたのです、爾るに今の私達には、なぜあのような燃ゆる信仰が起らぬでせう、たつた八九歳の少女でさゑ、近代人を泣かすに充分である程の鐵火迸る信仰であつたのに、なぜお互に佛の尊さを知りながら、それでゐてあのやうに天眞無垢の白道は歩めぬでせうか、誠に以て愧しき次第である、それがためには此開宗記念を最上の動機、無上の良緣として、昔の巡禮のそれの如き心地になつて本山や誕生寺に參詣したらと私は平素に希念してゐるのであります。

德嚴和上

此誕生寺の先住は德嚴和上と申上ます、今はその高弟で德定上人が師跡を繼ぎて法光を掲げておられます、此德嚴和上は稀に見る高逸な僧で近代には一寸比類のないお方でありました、丁度石見國西方寺で御說教の時、大德でもあり能辯の兩方揃ふたお方ですから、參詣人はさしもの本堂も一杯、椽にも鈴なりの狀であつて、それが皆鳴を鎭めて、水を打つたように謹聽してゐる、和上も調子に乘り、それでなくとも隨分躰軀を振つて震つてふりたくる和上が、その日は宛で天馬空を驅る式に高座の上で飛び跳ねられたものらしい、說敎中に高座から後ろの方に眞倒に逆落せられた、その墜落の秋シタノ帶まで明かに見ゑたそうです。

高座から墜落

今の今迄隨喜渴仰の涙にくれながら聽いてゐた群參、一度に堂つと笑出して、本堂もために破れるように喧々囂々である、おれは此年七十迄寺參をして居るが導師さんが高座からおちるなんていこれが始めだ、和上が褌までさらけ出して落ちられた、こんな面白い事はないとひしめきざよめき渡つた、これがお互であるならば赤面の至り再び面を會はせる勇氣も自信もない遁逃るやうに後堂に退くのでありますが、流石は和上だ凡調を脫して居る、再びノソラ〳〵と登座して、こら何が面白いか「

三途の巷に墜ちる愚を誡め玉ふ

何が面白いもあつたものか、導師さんが、和上さんが、誕生寺さんが。高座から眞逆に墜ちたんだ、これが笑はずに居れやうかと」滿堂再びわつと吹き出した。やゝ鎭靜するのを待つて、こら何が面白いか此大馬鹿者、高座から墜る位がなんだ落ちても恁うして再び逼ひあがることが出來るぢやないか、もしそれ、地獄餓鬼畜生三途の巷に墜ちたなら再び人間界に上がろうとあせつたとて逼上がる譯に參らぬぞよ、老衲は高座からは落ちたが地獄へは墜ぬぞよ、皆は疊からは辷り落ちぬが三途に落ちはせんか。さあここの道理が解つたなら、兎角の計ひからりとすてゝ、唯一向に南無阿彌陀佛ぢや、折角お念佛に出遇ひながら地獄におちたらそれが本當の大馬鹿者ぢや、笑れもするぢや、良いか解つたかと、聲搾つてのお話があつたと申します。

つひに閻魔の廳にいたりぬれば、つみの淺深をさだめ業の輕重をかんがへらる、法王罪人に問ふていはく、汝佛法流布の世に生れて、何ぞ修行せずして徒に歸りきたるやと、その時にはわれらいかゞこたへんとする。

法然上人の高潮なるお示は、德巖和上の當位卽妙の說法と彼此あひ照し合せて、增一增の指南を覺ゆるのであります。

私等は德巖和上の勸誡のその如く、笑はねばならぬことを笑はずに、笑ふべからざるを笑ふのであります。倩らく案ずに、お互は日常二六時中、心內は理性と慾情と鬪諍をして居るので、そして恒に常に理性は頭を抑へられ勝であります、菩提の螢は招けども來たらず、煩惱の犬は追へども去らず、理性は何時も逃げ腰で物慾の鬼は强くふんばつております。

法然上人はこの所を涙ながらに申されてある。

造罪の上の廢惡、妄心の上の息妄

廢惡修善は佛敎の正意なれど、廢すれども廢すれども廢されざるを何にせん。

息妄修心は行道の大本なれど、息むれども息むれども息められざるを何にせん。

何といふ人間味に滿ちた言葉でせう、七百五十年以前の法然上人も今日の御互も、心の有樣は同じであります、同然であるところに共鳴し同感し尊信するのであります。

かゝらんものゝ爲に、彌陀の本願は憑むべきであります、罪惡の臭泥身心の濁亂、爲すこと言ふこと行ふこと、擧足足下みなこれ自我滿足を扶護し增長するに過ぎざるお互には、大願業力の如來に縋るより外に道はないのであります。

他力の妙厭である南無阿彌陀佛は、造罪の上の廢惡の法です、妄心の上の息妄の行です、爾かも職業の生活にありながら念佛の大行は味驗せらるゝのであつて、生活を離れた雲の上に迥に月を見るやうな隔け離れたものでない、生活に即したる念佛が即ち法然上人の淨土敎であります

生活に即したる念佛

由來、佛法こしいへば、遠い高い深い敎で、なんこなしにお互の手が屆き惡いやうに思はれて居ります、高遠ではあらうかなれど仙人式で奧山の谷ふかきこころ流れ淸きほとりでなうては修行の出來るものでないものと想はれ勝であります、これは非常なる間違いで、道元禪師も「佛法を習ふことは、自己を習ふなり」とありまして、自己を習ふ所に卽ち佛法があるのである、自己を習ふことは、自己反省である、自己反省を根城とし、そこに增上し花ひらくのであります。

佛法は自己反省の敎

古の佛法は、高野の山か、叡山の嶺か、三井寺かそれともクヽマ生駒に登らずば佛道修業は出來ぬものと思はれて居た、商法をしながら家業

空也上人の念佛

にありながら、佛道修行は到底出來ぬこゝ考へられてゐた、こゝに空也上人と云ふ念佛の大德あつて、この迷妄を破らんがため

念佛は口にまかする三昧なれば市中も卽ち道場なり

と御說法あつて時人の夢を覺まされたと傳にております、その當時ごしては破天荒の宣言でありまして他力念佛の妙法が生活に卽し、治世產業皆これ實相の念佛であることを示めされたのです。

口と心にまかする念佛

手と足は忙しけれど南無阿彌陀
口と心の暇にまかせて

確に此歌の通りである、今日時代が進步發展して、手と足が忙しいだけでない、口も心も同樣に非常に多忙だから念佛申す餘暇がないなどと云ふ、よし

口と心が手足のごとく眼の眩むやうに忙しくても、念佛はそれ等の惣てに邪魔せらるべきものでない、念佛は吾人の手足、心口につくりつけられたものです、一念往生の願心だにあらば朝々夜々、出息入息、擧足足下、立居起臥、なほ念佛の申さるゝのが淨土宗の勸むる南無阿彌陀佛であります、易修易行、これが法然上人の着眼あらせられた點であります。

本說

佛告阿難　若有衆生　願生彼國者　發三種心　卽便往生　何等爲三　一者至誠心　二者深心　三者廻向發願心　具三心者　必生彼國　の文

○

今席より正しく淨土宗安心のお話に進みます。

淨土三部經

只今拜讀し奉つたは、佛說觀無量壽經の御文であります、略して觀經と申します、皆さんも既に御承知の通り。淨土三部妙典と申して、年回佛事に讀誦するお經を三經と申します。此三部經は元祖法然上人が淨土宗を御開宗遊した本典であつて、三經から念佛が出たのであります、三部のお經の名を擧げますと、佛說無量壽經略して大經、觀無量壽經、略して觀經、阿彌陀經、略して小經であります、極手短に略して大、觀、小と申して居ります、何卒これだけは御記憶を願ひます、こいふのは、私が去る地に參りまして、お話をしたときに、三部經こいふのは同じお經を三返繰返して讀むことですかと尋ねた婆さんがあつた、爾かもその婆さんがその寺では熱心な信者であつたから私はあまりに意外であつたのであります、これ等は無智無學なるが故でない、聞かせてないからであります、本日の參詣衆は何れも立派なお方達だから是れ三經の名前だけは覺えておいて下され。

佛告阿難話相手の必要

さて前に拜讀した御文は先程申した通り觀經の御文であります。

第一、佛告阿難

佛告阿難とは、佛が阿難に告げらるゝのであります佛の說敎にも對告衆こいつて、話相手がなければ佛もお話が出來ぬのであります、丁度わ

信の友

たくしの本日の說教も皆さんといふ話相手があるからして、一二席のお話も出來るのであります、「話相手」これ程世に大切なものはない其人をしらんとすれは其友を見よで友達の二三人を觀察すれば、その人格人品品性は畧ぼ讀まるゝのであります、擇友は讀書よりも肝要なる旨は先德の誡めであります、皆さんが此席へお參になるにつけても、信友に誘はれて同行に勸められて來たお方が必ずや數十人あるこれもふ、誘ふところの本人は信心のほど感ずべきは勿論であるが、我を誘ひ勸めて吳れる友達を持つてゐることは頗る幸榮と云はねばならぬ。同信、同行、同朋の歡喜は、不信外道の輩の到底推し計ることのできないものがあります。

同名號を唱へ、同一光明の中にありて、同聖衆の護念を蒙る、同法尤も親し。

眞の友

念佛の聲する處に眞の友を得

なんと云ふ有難い境界でせう。涅槃經に「信心あるものは誠の友をう」と說かせられてある、私は此一言を肝に銘じて忘れないのであります、信心あるものは誠の友を得、誠に爾うであります、吾れに眞友益友のないのは、我に信心がないからであります、信心だに深からば求めずとも自然に誠の友は得らるべきである、法然上人は四百年の前に善導大師と云ふ友を得られた、聖光上人は法然上人といふ友を得られた、記主は鎭西上人と云ふ友を得られた、これ等は得たいとしても得らるべきでない念佛の徹底せる信念が任運に得らしめたのである、前代の事例は暫くおく本日參聽の皆さん、眞の友達が幾人ありますか、益友がどれだけありますか、他人に問ふ必用はない、外を考へる用はない、靜に胸に手をあてたら寡いのは眞實の友達だ、曉天の星と云ふがそれより尙ほ寂々寥々であらう、これ他なし、我に信心がないからぢや、要は信心の培養だ增

長だ、これを想ふにつけても忘れてならぬのは念佛の御聲である、南無阿彌陀佛の聲するところには、眞の友の集る場所であります。

南無阿彌陀佛と唱へ給へば、住所は隔つとも、源空に親しとす、源空も南無阿彌陀佛を唱へたてまつるが故なり。

此本堂が俱會一處なり

極樂淨土のていたらくを、諸上善人俱會一處と阿彌陀經に說かせれらてあるが、豈に極樂淨土ばかりでない、今聽聞しつゝある此本堂が諸上善人俱會一所であります、こゝには阿彌陀佛攝取の光明の護念を垂れ給ひ法然上人も俱に來臨して念佛を唱へ玉ふ、老若男女善女善男の異口同音の念佛は此世での極樂であらねばなりません。

恁ういふ念佛の連を得たと云ふことも、しかしながら信心の故であります、「話相手」なんでもないようですが、極樂參りの話相手これは一大事因緣であります。

引きずる力

汽車の譬

信するは力なり

鐵路をひた走りに走つておりますあの滊車、滊車は御承知の如く機關車と箱車であります、機關車は一つだが箱車はボーギーでも五個十個と連結してある、數の上よりならば箱車は澤山で、機關車はたつた一つである、けれども力の上よりいへば、一つの機關車は引きずる力がある、客車貨車は引きずられてゐる、引きずると引きずられると大變な差であります、同じように、女房に引きずられる亭主と女房を引きずる亭主とは非常な相違であります、金に引きずられる人は守錢奴であり、金を引きずるものは理財家である、何故に一つの機關車は引きずる力を持つかそれは內に炎々たる火があるからであります、信ずるは力也、お互が信ずる以上は、引きずるの力でなくてはならぬ、機關車でなくてはなりませぬ、客車貨車であつてはなりませぬ、引きずる寺參も引きずられての參聽も、遂には一蓮托生の往生ではありませうが、希くは引きずるの信

者となりたい、機關車は何時の場合でも先頭に立ちます、恰もそのやうに、念佛の先頭、寺參の先陣でありたいものです、同信、同行、同朋の中でも信念厚く深く、爾かも熱したる人は、引きずる力の先達であり、長者であり、最上人であります、稀有人であります、最勝人であります

つゐ話がそれたようですが、佛告阿難の一句は淨土往生の安心を說き給ふ話相手の句であります。此阿難尊者を相手に如何なる安心が說かるゝでせうか、次席よりその信談に進みませう。

若有衆生願生彼國者の二句

第二、願生彼國

若有衆生、願生彼國者、此二句は、もし人が彼國へ生れやうこしたらと云ふ意味であつて、宗門に取つて甚だ大事な二句であります、此二句を淨土宗の惣安心と申して、簡略に云へば之れで宗旨の安心は盡きるのであります。

總別二種の安心

本宗に於いて、惣別二種の安心を說きます、これは說明の便利上やらと得心の都合上やらで、二種の安心を別つのであります、別安心は次き下に、一者至誠心、二者深心、三者廻向發願心とあるのがそれで、何れ後々の席で篤とお話をいたしますが、それに對して、今の二句を惣安心と申すのであります。惣安心とは大体の安心であつて、厭離穢土、欣求淨土の心であります、厭離穢土は厭の一字に籠り、欣求淨土の四字は欣の一字に收まる、由て要約して厭欣心と申しております、つまり此世を厭ふて淨土を欣ふの願心を指すのであります。

總安心

厭欣心

御經文には願生彼國とあるから、これが欣求淨土の欣に當つてゐるのは一目瞭然であります、が別に此世を厭へといふ厭離穢土のお言葉は見ぬやうですが、意を先にして考へますと、何故に彼國を願ふかといへ

ば此世を厭ふからであります、厭はずば願ふ心は起る筈がありません、だから此二句の若有衆生、願生彼國者が惣安心の厭欣心であると申します。

此の所で、常に聞く話でありますが、淨土宗は厭世教である、厭離穢土を惣安心と教ゆる法然上人は厭世家である、平家沒落當時の社會であればいざ識らず、少くとも現代に於ては、非現代式の教である、有つて用なきのみか、有害無益の宗旨てあると云ふの非難であります、これに對して種々なる有理の議論や有益の反證が試られてゐますが、私は淨土教は難者の難せらるゝ通り痛烈なる厭世教であると信ずるのであります、私達は光顏巍々として威神極りなき寶前に跪き、彼の淸き御國の嚴淨に戀ふとき、どうして、眼前に展開さるゝ世相に滿足が出來やう、前も後も見ず、唯眼前の刹那に滿足する程の短見では腰が落付かぬのであります

一念願生の心が即ち總安心なり

厭離穢土の淨土宗が如何に人心を淨化し遷善するかは、念佛に信を獲た人に於いてのみ視らるゝ境界であります。

孝仁天皇の勅詞の如く

民心を默々の際に格し、我治を冥々の中に助く。

これが念佛の力であります

彼の佛の御國が尊く有難く偲ばれて、一念願生の心を發しますれば、これが即ち惣安心であつて、別安心と申すのも此外にないのであります善導大師も『種々方便、發起我等無上信心』と仰せられて釋尊も、阿彌陀如來も、六方の諸佛も、三世の諸菩薩も、だうかして末世凡夫、十惡衆生に無上信心を起さしめたいと種々に方便し玉ふのであります。

了簡の悪い子を持つた親は明け暮れ、早く本心に立復るやうに願はないものはない、丁度み佛もろうの通り、今日は眼をさましてくれるか、明

發心の難

日は氣がついてくれるか、だうしたなら速に信心に甦生させることが出來るかと大悲の肝膽うち碎きて御胸を痛めさせられてあります、この親さまの御心配を思ふたら、一念發起無上信心と念佛の信を發すべきであります。

信心の功德は煩惱に縛せられてゐるれ互には、其力を徹見する柄ではありませんが、涅槃經の上には發心畢竟二不別初後二心爲難とありまして（畢竟とは成佛すること）佛になるが困難か發心するのが困難かと云へば成佛の難よりも發心するが方いやさらに難事であると說かれてあります。

往生は難きにあらず願ふの難きが故なり。

誠にそうです、願ふこゝは、一見め易すうですが、願往生心は爾かく容易なものでない、故に難發の信と申されてある、此の起し難き信心

新羅明神の告

眞劍の發心

が、見佛聞法の增上緣に由て始めて起さるのであります。

昔、叡山と三井寺との間に天台座主のことから大悶着が起つた、氣の荒い叡山の法師連は、容赦なく三井寺を火攻にしたので、折角の七堂伽藍も佛像經卷も丸燒になつて了つた、ところで三井寺には『新羅の明神』と云つて智證大師已來の鎭守の社がある、或日一人の坊さんが、その社で通夜をしてゐると、不思議にも明神樣が現はれた、有難やと拜んでみると、明神樣は頗は上氣嫌で笑さへ含んで御座る、奇怪に感じたのは此坊さん、明神は吾山の守護神である、一山丸燒の今日、一体何がお氣に入つての上機嫌だらう、どうも合點が行かない、うこで僧さんは『御覽の通り一山は丸燒けの悲運！このミシメな光景を御覽じては嘸かし深い御歎きであらせらるゝと思ひますが』とさも不足けに尋ねたのである、すると明神の御口から、『三井寺の全燒は勿論悲歎の次第だが、しかし此

丸燒の修羅諍鬪の巷を見て、殊勝にも發心出家の昔を想ひ出し、眞劍慚愧して眞實菩提の道に入つてゐる坊さんが一人ある、自分はこの發心が悅ばしい、この發心が眞劍らしくてならぬ、これで悅んでゐるのである堂塔伽藍は錢さへあれば出來る發心は錢では買へない寶である、此發心は千万人中にすら尙求め難い、それで自分は隨喜して悅んでゐるのである』と仰せられた、これを承つた僧さんも亦發心したと申すことです。

これに類似した活きた話が近代にもあります。

芝中學校の燒失

東京芝公園内に芝中學校があるこれは淨土宗で社會奉仕の一として建てゝゐるのであります、三年程前に全燒した、うのおり校長渡邊海旭先生が、未だ消ねやらでクスブつてゐる燒跡に全生徒を集めてこんな學校の燒けたは別にくやむことでない、燒太りでより已上の物が忽ち建つ、もし諸君の精神が燒けたならもう一生涯建て直しは出來ぬ、何卒精神を全燒せんように願ふと訓誡されたと聞いております。

なんと願心は有難いではありませんか、願生彼國の一念さへ確立すれば念佛は自然とそれに伴ふのであります、その所には難つかしい理窟は必用でない、經論の明文を搜ぐる勞もゐらぬ、たゞ何んとなしに淨土が慕しく、如來の誓願が賴もしく、獨り手に念佛の唱へるゝは、淨土宗の初門でありまして同時に終窮の極談であると許すのであります、初門が極談入口が奥座敷とは一寸奇辨のやうであるが、そこが淨土宗の尊いところであります、こは漸次席を累ねて申上げませう。

大正拾一年二月七日、京都市寺町通高辻上る淨土宗永養寺の玄關に一人の男が案内を求めた、其の聲を聞いて小僧さんは急いで玄關に出て見た、彼の男は、私は伏見街道の淺田太三郎から參りましたが、内の御孃さんが死去されましたから何卒明日御葬式をお願ひしたいと思ひまして

それをお賴に參りました、固より私の所は神道で、今回が初めてお賴を申すのであります、どうぞ御都合を繰り合せて、是非共お願を致しますと願はれた、所が生憎住職石井龍善師は不在であつた、けれども小僧さんはお歸り次第早速その由を傳へますと、快き答をされたので、男は喜んで家へ歸つた、間もなく石井師は歸へられた、所が石井師が思はるゝには、淺田はもとより檀家でもなし、賴も餘りにアツサリとしてゐる、何やら變んな氣がする、その上少女の事なれば、明日の葬式はいかにしやう、戒名は妙智善童女とつけて置かふかなどゝ、色々心は迷ふたが、兎も角今晩參詣して、其の子を拜んで來やふと思ふ心が勝を制したので遂に其晩參られた、所が彼方へ往つて見ると家は可成の舊家らしく、何から何まで行き屆き、家内皆々心ありげの奥ゆかしさは、すべての物に現はれてゐる、歡んで迎にる其の態度特に丁重な扱ひ振は、少なからず

先きの豫想を裏切つた、かくて石井師は、歡びの内に迎にられて、少女の安らかに眠つてゐる清洒な座敷に這入つて見ると、少女の眠つて居る頭の上には、小形當麻曼陀羅、三尊の來迎佛、元祖大師の月影の御影、親鸞上人の畫像、聖德太子の肖像など、五幅の掛物がかゝつてゐた、其の前には丁重に香華燈明が整然として供へられてあつた、而して其處には彼の少女が、恰も大理石で刻んだ美しい天女の如く、半眼微笑の愛らしい姿で永遠の眼に入つてゐた。

石井師はいとも懇に、眞心込めて讀經念佛し終られた時、何やら心が變にかわつて全く先の考へとは一變して了つた、而して兩親及親戚にも先づ一應の挨拶をして間もなく寺へ歸へられた。その翌の日に石井師は自ら葬式に參られて無事に葬式を終られたが、さて此間に石井師が最も不審に思はれたのは少女の枕の上の方に、種々な掛物が掛けてあつた。

ことである。さりながら雙方倉卒の場合でもあり、互に心の落ちつかぬ折であるので、込み入つた話もすることが出來ず、そのまゝ不審は殘されたが、然しながら、此の不審こそ、私が今此席で皆さんに紹介したいと思ふ最も大切な主題であります、葬式がすでに濟んだのち、石井師が初七日の法營を終つて細かに兩親から聞き取られた話の大要は斯うである

お世話になりました娘は、本年十一歳で其の名を年子と申します、天性穩當なしい子でありました、學校の先生からも、あの子は一人特別である、穩當で而かも出來が良い、誠に模範の子であつたと、此頃も褒めてくださいました、然しながら如何なる因縁でありましたが、佛縁が深くあつたとみへて、私の家は元來神道でありまして、佛教とは更に關係がないにも關らず、五條通り建仁寺町西へ入る、眞宗のお寺に說教のある度にいつも參詣をしておりました、私は神道でありますから、餘りにそれを喜ばなかつたのでありますが、年子も好んで往くまゝに思ひに任かせておきました、所が圖らず今度病氣になりまして、段々病が重くなり、最早や自分でも助からぬと思ひましたのでせう、お父さんどうぞ三尊の來迎佛をお寺で借りて來て下さいませ、そうして私の枕の上に掛けて置いて下さいと申しましたが、固より私は神道の事とて三尊來迎佛などいふものは、夢にも知る譯はありませぬから、そんなものがあるかしらん、なにやら變なことを云ふとて暫く躊躇しましたが、年子は切りに申します、必ずあります、きつとあります、是非共早くと急ぎ立てますから、否みかねて、お寺へ尋ねてみました所が、年子の云ふ通でありましたので、非常に不思議に思ひまして、旱速拜借して掛けました、年子は大變によろこんで、兩眼からはら〳〵と涙を流し、忝しく拜んでおりました、其後マンダラも借りて下さいあれもこれも申しますので、言

年子臨終の有樣

ふがまゝに拜借して年子の心を喜ばせました。

その後、年子も重き病の中からも、絶にずそれ等を拜んで、喜んで念佛を稱へておりました、おかげで餘り苦みもなく、不平も小言も少もなく、心は常に安らかで平和であつたように見へました、追々死の日が近寄つて來た時、枕邊にある兩親を呼んで、あゝお父さんお母さん、極樂さまが誠に有難く私は只今拜見しました、私は間もなくあの極樂さまに生れさして頂くのでありますから、誠に喜しいことであると申しますから私共は何か熱にでも浮かされてゐはしないか、或は夢でも見たのではないのかと思ひ、そんなことがあるものか、それは何かの間違であらうと色々尋ねてみますと、あなた方には見にませぬが、あれあの通り美しく諸佛諸菩薩も在しますものを、あゝ有難いことである、それを何んぞや、あなた方が、うそ僞りだと仰しやるのは、あまり邪見でありますと一心に空を眺めつゝ非常に喜んで居りました、此には兩親もほと〳〵感心させられて、實に不思議に思ふのでありました。

いよ〳〵壽の終らんとする時、どうぞお父さん私にお十念をお授け下さいと申しましたが、もとより十念といふようなことは存じてゐる筈はありませぬから、お十念はどうしたら可いのかと申しますと、あなたが一遍念佛を稱へて下さると、それにつれて私が一遍唱へるので、その通り十遍稱へるのがそれがお十念でありますと教へられて、私がお十念を授けました、すると又お母さん、あなたもお十念を授けて下さいとて、母からもお十念を授かつて、非常によろこんだのみならず、私が御恩深きあなた方に先き立つて、極樂さんへ參るのは誠に失禮ではありますが命ばかりは何んとも致し方がありませぬ、何卒お許し下されとて、誠に安らかに眠るが如く極樂へ參りました、それには兩親も魂の底から感じ

込みまして、圖らずも今回神道をやめて、お寺へお願に出た譯でありますこと、よろこんで其れを物語られた。

なんと皆さん、有難い話ではありませんか、お話しながらも先き立つものは涙であります、たつた十一歳の天眞爛漫の少女、清淨無垢の乙女が恐ろい病氣の暗ら闇から光明の淨土へ救はれた嬉さ、大悲の暖かき懷に安かに抱かれた有難さ、なんといふ結構なことでせう。

さあ此話に就て思ふてみるがよい、僅か十一の小供ちやから、宗意安心の深い譯を聞いたわけでもあるまい、よし聞いたにしても仔細なことが解る年でもあるまい、それが斯ように目出度い往生をしたのはこれが淨土宗の味ちやこれ外ではない、願生彼國の一念で、南無阿彌陀佛と稱へたからちや、法然上人のみ教は即ちこゝちや、念佛の法は、六つかしく云へば六つかしくも云へやう、七面倒に說けば七面倒にも說やう、なれども法然上人のみ教は、六つかしく云ふたり七面倒に論ずるのでない愚鈍念佛第一の機、西も東もしらぬ法然房が念佛して極樂へ參るなり、十惡の法然房愚痴の法然房が念佛して往生するなり、此外に全く別義のないのが、法然上人の教であへます。

もし六かしき念佛なら、元祖大師は十八歳より四十三歳、足かけ廿六年の御苦勞はない筈ちや、念佛をあ易くするため長の艱難苦勞があつたのぢや、念佛は彌陀如來の誓願ぢやないか、面倒や手數がかゝるなら他力の本願の所詮がない、老若男女のゑらびなく、唯只念佛だに稱ふれば決定往生疑ひなし、淨土宗の教へは詮する所は之を出でない。

念佛は申すより外に別の仔細なし、仔細なき所に仔細をつくるとき往生の道にはそむくなり。

さあ十一歳の年子のやうに、願生彼國の一念で念佛相續するのが何よ

り肝要、これが苦有衆生願生彼國者の意であります。

第三、發三種心

別安心
三心

さて次は發三種心、三つの心を發せこの仰であります、これから前に述べました別安心の席になるのであります。

この三つの心を『三心』と申しております、三心とは、一に至誠心、二に深心、三に廻向發願心であります、ところが三部經の内阿彌陀經には一心不亂とお說き遊ばされて、一心と出てゐる、爾るに今此の觀經には三心を發せとある、三と說き一と勸む、その邊のところはどうしたものかといふことは心得てゐて頂かねばならぬ。

一心
タスケタマへの一心

阿彌陀經の一心とは、往生淨土の一心である、往生淨土の一心とは、助け玉への一心であります、淨土宗の敎は、タスケタマへの六字に籠る

二祖鎭西上人は

淨土宗最要の一言は『助け玉へ』なり、辨阿（鎭西上人のこと）は口にもいひ心にも思ふなり。

と仰せられております、これを三祖記主上人は

實なるかな此の言、賢なるかな此の心、仰いで先師の口訣を顧るに、落涙千行なり。

と隨喜し讃歎し渴仰あらせられております、もしか淨土宗がウズ高い六つかしい敎であつたら、お互に及びかぬる、だが、高い敎でない、手の届かぬ法でない、只たすけ玉への心に淨土宗の深い謂はれが收まり籠つてゐると聞いた上は、お互の身にも力にも契ひ、たゞこれだけにて未來永刦の迷を離れて、往生淨土の素懷が遂げらるゝかと思へば、仰いで先師の口訣をかへりみるに落涙千行であります。

人は簡易なものを卑む癖あり

實行難の例

鼠の會議

けれども人間は妙な動物で、自分の手のこゞくやうなものは卑淺下劣とし、及びもつかぬことを、高尚だ深遠だとする癖があります、これは一つの迷である、そうして此迷が存外に根深い。

或一軒の壞れかけたボロ家があつた、そこには何百匹の鼠が住んでゐた、それが猫に見出されて晝夜の別なく、親鼠子鼠の選びなく食はれたなんぼ鼠算で增殖は彼等のお特意とは云へ、これではたまらぬ遂には全滅ちや、こりや今の内に好策を運らさねばと長老株の古鼠が、暗い闇い天井に惣會議を開いた、集るは集るは、チユウ〳〵、トントン、ガタガタ、何れも揃つた八の字髯、親も子も皆ひげ連中、髯で人格が出來るなら、驚く勿れ鼠どんは皆人格者、餘談はさておき、長老鼠ひげをひねり直して一段高くチユウ〳〵鳴いた、一同水を打つた如く靜まる、さて、諸君も承知の通り、かく迄、毎日毎夜猫にやられちやたまらぬ、そこで三人寄れば文珠の智惠だ、諸君の有りつたけの智慧を搾つて、何んとか良策をお願まうす、お互の生命に拘はる重大問題だから何卒ぞ愼重にお願まうすと切り出した。

これを聞いたチユウ〳〵連、皆髯をひねり小頸を傾けたが別に妙案もない、やゝ久うして片角より小鼠が勿體らしく眞中に出て一同に云ふ。

諸君わたくしに妙案がある、吾黨が毎日猫に食はれるのは、猫の來るのが前に解らぬからである、もし來るのが前知さへすれば、逃げ道はいくらもある、だから猫の來るのを豫知する法を講ずるが最上である、それが爲には猫の頸に鈴をつけるのが頗る妙策である、此外に他に道はあるまいとおもふ。

これを聽いた一同成る程と合点し賛成サンセイ滿場一致で拍手喝采裡に議決した。

實行困難

それでは誰れが猫の頸たまに鈴をかけるかといふ實行談になつたら、一匹逃げ二匹遁げ遂に切角の會議がおちやんになつて了つたと申します

今も丁度その通り、眞言、天台、華嚴、禪の聖道門自力の敎は、甚深微妙の敎であります、法は結構でありますが、悲しいかな、こちらの機根が下劣である、猫に小判、小判が悪いのでない、猫が悪い、それより

一心を細別すれば三心となる

も鰹節か鰯がよろしい、お互の下劣下根の者から見ますれば、諸宗の法門は結構ではあるが、自力難行道、猫の頸に鈴を着けやうとする鼠に均しいのであります、爾るに他力易行の法門は只助け玉へである、なんといふ有難い法門でせう、仰顧先師口訣、落涙千行也の三祖さまのお悅も又所以あるかなであります。

この助け玉への一心を細く別けて見れば三心と岐れる、よろしいか、茲に一脈の糸がある、此糸は衣服を縫ふのは御婦人方のお用になるもの

一本の糸の撚

である、此一本の糸は誰れが見ても一本で二本三本でない、小供が來ても成人が見ても誰あつて二本ちや三本ちやいふものはない、これは餘りに明か過ぎてゐる事實であります、是れが卽ち一心の味である、此一すじの糸をヨリを戻して見よ、二本三本の小糸となる、今阿彌陀經の一心をヨリを戻して見よ、觀經の三心となる。そんなら

なぜ一心のヨリを戻して三心とする必用があるか、これ又聞かねばならぬ大事の心得である、一心で良いのちやそれを一心のヨリを逆して三心と細說し玉ふ所に佛の大慈悲がある。

髮の例

例を取つて申さう、本日は大分婦人衆が多いやうちやが、女は髮が命だ、その髮が一本の元結で散らぬやうにしてある、その大切な元結を切つてバラ〳〵するのは何故か、髮をすき油をつけ見事に確りと結び直さんがためでないか一心の元結を切つて三心とバラ〳〵にするも、疑や

病氣の櫛を入れて元の一心に結ひ直し結び固めん爲に、佛さまが三心と別說あらせられたのぢや、疑の櫛を通した後は、元の一心に立ち還つて已前より立派な安心の髮を結ばねばならぬ。

三ツ四ツと別けて敎ゆる法の糸
思ひよるにゥ南無阿彌陀佛

大事なことは屹度言ひ返し繰り返すものであります、親が悴にだうだ悴了解したか、ハイ解りました、慥かに解つたか、ハイ確に解りましたそれに相違はないか、ハイ全く相違ありませぬ、そんならこれで可いなあ、ハイこれでよろしい、全くか、ハイ全くです、それでは念のためにもう一度尋ねるが、本當に解つたか、ハイ本當に解りました。

此問答を他人から聞いたらどうでせう、くどいにも程がある、まあ克く悴がうるさいと跳ねずに返事をしたものと想はれる、けれども大事の事件で而かも親子の間ごして見れば、茲に掬しても掬すべからざる親の慈けがある、今も亦そうです。

一心と說き三心と岐けるのも皆み佛の厚き善巧方便の賜である、此の賜に對し、至心に恭敬に、掌を合せて、一心の由來を聽き、三心の次第を味ふ、これが淨土宗の信者であります。

御覽の通り私は、話は極めて下手でありまして、その上、智慧も學問もなく、不德の身でありますから、尊い宗意安心上の事などは、取り次ぐ柄ではありませぬ、だから寧ろ默する方が可いかもしれませんが、さりとて說かではお傳へも出來ませぬから、止むなく連日御話に及んでおる譯、實に慚愧の至りです、この上は皆さんに上手に聽いて頂くより致方がありませぬ、上手に聽くといふのは、聽く氣になつて聽いて貰ふことです、さすれば下手な話も推量できます、合点が參ります、連日の說敎

上手に聽くこと

道樂息子の話

は私の話を聽くのではありませぬ、如來の本願の謂れを聞くのであります、吾れに眞實聞く氣がありましたら如來は遙に知見し玉ふて、必ず加被護念を垂れ給ひまするから、連日の法緣をして必ずや意義あらしめ玉ふのであります。

去る所に、道樂の息子があつた、大酒を飲む博奕は打つ、女郎は買ふ飲、打、買の三調子揃ふた極道もの

私はこれから道樂やめて

酒と博奕と女買ふ

家を餘所にして十日二十日とブラツキ歩き、ふらりと歸るのが例であつた、道の父も我慢しかねて、貴樣のようなものは人間ぢやない、子ではない、本日限り勘當だ、何處へなりとも勝手に行け、山か谷の中で野たれ死でもしやがれ、さあ出ろと權幕に叱りつけた、フン。勘當。こりや面白い、こちらから願いたい位だ、さあ出るぞ此耄錄め見ておれとつかゝと門口より出やうとすると、門口からは出てならぬと云ふ、致方がないから裏口より出やうとすると、裏口からも出てならぬと親がいふそんなら窓かとすれば、窓からも出てならぬと叱かる、万策つきて椽から飛出さうとすれば、椽からも出ちやならぬといふ、そんなら出處がないそれに出ろと銅鳴る、人を馬鹿にするも程がある、この糞爺めよい加減にしやがれと、赫と怒つて父を蹴飛した、父はおのれ畜生どうすると思の外蹴飛す吾が子の足にしがみつき、こら兄、お前は俺の心が汲み取れぬか、たつた一人の悴ぢやもの。何所へ出してなるものか、なんぼ極道のお前でも、私のために大事の小供、世間からは子に甘い親馬鹿者ちやと笑はれても、お前と一緒に暮すならどんな苦勞も辛捧する、か程に思ふ親心、推量してくれ、これ兄、門からは出しはせぬ、裏口からも出

てならぬ、こら枠私の心が解つたかと、熱き涙をハラ〳〵と我が子の足にふりかけた、邪見な息子も驚いて始めて眼がさめたと云ふことです。

今も丁度その通り、六道輪廻の迷子、罪に罪を造つた道樂息子、諸佛菩薩に勸當せられ、十方の淨土より出てゆけと、見離されたお互を、阿彌陀如來一人のみは、大慈大悲の親となり、十劫正覺の昔より、コイヨ〳〵の御方便、やらんかたなく思召す親の情けが解かつたなら、話す私は下手であつても、あな有難やと、念佛の信が起きねばなりませぬ。

第四、至誠心

其一

今席より正しく、第一の至誠心のお話にかゝります、善導大席は『至とは眞なり、誠とは實なり』と仰せられて眞實心のことであります、この心を念佛の信者は是非に起せと勸むるのであります。

訶梨跋摩尊者の成實論に、三人塔を廻ると云ふ喩がある、これを先づ聞いて貰いませう、塔は皆さんも京都や奈良で御覽の通り、高見の風景の佳い所にあります、そして塔へ參つたものは誰でもグル〳〵と廻るものです、今三人の中のその一人は。手に珠數もち乍ら口に念佛稱へながら塔を廻はつてをる、次の一人は、信心の心はなけれども、見徹しのよい風致ぢやから氣晴し心でゾロリ〳〵と廻はつてをる、最後の一人は、信心の心では勿論ない、こいつて氣晴でもない、もし他の二人に隙があつたら與市兵衞をせしめてやらう、懷中を睨つてやらうと泥棒の心で同じさまに廻はつてをる、その動作の姿や形より云へば三人同一に塔を轉廻つてゐるのぢやから區別はないが、もしそれ、精神内に立入つたら天地の相違である、佛道の行人も亦かくの如くであるこの比喩であります

此喩によりて反省せよ

訶梨跋摩尊者は印度の人で遠い國であり、かつ二千年己前のお方であるが、此の喩に表はされた精神に於いては、お互の藥として反省せねばならぬことゝおもふ、本日の參詣はざつと二百人あまりもありませう、皆手に日課珠數をもち、口に念佛を唱へ、如來の寶前に座り、往生淨土の大法を聽く、形の上より云へば皆立派な同行である信者である、だが形は標準にならない、姿はあてにならぬ、佛法は心が大事、もし如來さまから御覽下されたら、三人塔を廻るのやうに、色々と區別の人がありはしまいか、勿論眞實の心から詣つた人もあらう、中には氣晴らし心の骨安すめに來たつもりの人もあらう、或はまかり間違へば言葉殿でも捕へて批難抗擊してやらうと、聞くを先にせずに、けなすを先に立てゝ來た邪見人もないとは云はさぬ、話す私は凡夫故、皆さんの心を徹見する の力はない、この人は恁ふ、彼の人はあアと、見別ける力はない、なあ

參詣人のいろ〳〵

なあ、人前は飾ることも出來もしよう、人の心は胡麻化すこともなりもしよう、だが佛樣の前は飾つても役には立たぬ、胡麻化してもそれは通らぬ、佛の知見や照覽を恐れたら、眞實の心に立ち復らねばならぬ、これが卽ち至誠心である、此の心にて此會座にある人ならば、それが眞實の阿彌陀如來の赤子である。

けれど常節の寺參に、かやうな眞實の人は、藥にしたい程しかない、殘念なれど詮方がない、大方の寺參の人の心を云へば、本日說教があるそうな、下手か上手か聞いてこよう、同じことでも、上手か下手かと上手を先に立てれば少々可愛いが、それを下手を先に立て、下手か上手かと云ふさへも氣障のことだ、これなら上手がお伴で下手が主人にある、下手だらうが參つてやる位の心持だ、未だそれのみぢやない、雨が降つたら參ろう、天氣なら仕事澤山あるから止めにしよう、早くから參つて

念佛申すのも大義ぢやから説教眞近に往かう、先づそれ迄は煙草と阿呆煙草をスパリ〳〵、庫裡での話は足引の尾のなか〳〵しうても本堂のお勤に遭ふことはせぬ、漸やく説教を聽き出したが、念佛を口に出すかと思ひきや口には菓子が一杯だ、少し話が長ければ、横眼あくび居寢り勝手放題、その内説教がお終りになる、何の爲に詣つたのやら薩張り譯がわからぬ、先づこゝら位のものだ、爾しこれは本日の參詣衆のことぢやない遠い遠い外國の詣り人に就てのお話ぢやから安心あれ。

在家の皆さんばかりぢやない、出家の身である私達も眞實の心は有り惡いものです、これは袈裟衣の手前誠にた愧しい次第である。

解脱上人と惠明上人

往昔、法然上人の御時代にやゝ後輩ではあるが、奈良の都に大德が二人在しました、解脱上人と明惠上人である、傳説では、春日大明神が二人を太郎次郎と兩手に花と御悅びなされたそうです、そして明惠上人には明神が隔てなく對話になるのに、解脱上人には簾を隔てゝ對話になつた、それは解脱上人には未だ學に慢ずる氣分があつたからだそうです なんと慢心は恐ろしいものでないか、遂にそれが基となつて、其の後、隱遁して眞の發心をなされた。

そのおりの歌に

これをこそ誠の道とおもひしに
なほ世を渡るはしにそありける

してみれて皆さんや私だけでない、上代の先德方でさへ、ウカとすれば眞實の心は失せ果てゝ世渡りの身ずき世すぎになり勝とみゑます。

往生は世にやすけれど皆人の
誠の心なくてこそせね

それでは、如何にしたら誠の心でありうるか、どうしたなら眞實の心

修養の二道

自分で修める

相手を求めて修養する

になりうるか、これが大事の御話である、可いか、こゝが自力他力の分岐点。克く注意してほしい。

一体、お互が修養するに二道ある、一つは自分で修めること、二つに相手を求めて修めるのである、碁を打つでもそうだ、自分獨りで打つのと他人と打つのと兩方ある『碁敵は憎さもにくし又可愛い』で、碁は面白いものです、相手と打つ碁客はこれは普通の碁打、相手なしに獨りで黑白を並びて研究するのは、飛拔けた熱心家である、丁度その通り自修自勵の出來る人は餘程の勝れた人であります。常にいふ

君子はその獨りを慎む

獨慎これ誠に結構ではあるが、お互には出來悪いこれが自力難行の誠である。

次には相手を求めての修養、これが万人向の易行である、ではその相手を何に求むるか、西郷隆盛が『人を相手にせず天を相手とせよ』と云ふておる。

天を相手にする

これは名高い言葉だから皆さんも御承知でせう、西郷は人を相手にせず天を相手とした、此天を相手にすれば必ず眞實たり得るものであるとしておられる、如何にもそれに相違あるまい、ぢやが、その相手にする天はどんなものかと深入りして見れば、ぼんやりとしてゐる。

金や名譽を相手にする

それでも天を相手とした隆盛は偉人である、普通のお方の相手は果して何んでせう、金か、名譽か、美田か、權勢か、お酒か、別嬪か、要するに生活が目標でせう。

貪瞋、邪僞、姦詐百端にして悪性やめがたく事蛇蝎に同じ。

彌陀を相手とする

相手が悪いから斯ような境界を暮らさにやならぬ、然るにお互は何の幸か、超世願王の阿彌陀如來を相手とする身の上であります、凡夫とし

助け玉への一念が卽ち至誠心

牡丹餅流の心得

ての私の心は、鬼が住み蛇が宿り、殘忍、酷薄、譎詐、險兇、醜惡であります、この淺ましさに驚き、大悲の尊前に歸投して『助け玉へ』と唱ふ、その助け玉への一念が、その儘にして『至誠』であり『眞實』であります、不可思議なる盡十方無碍光如來に順歸する心、これ程眞面目のものが何處にありませう。

ともすると信者の內で、此の至誠心に就て妙な考へを持つておる、それは『助け玉へ』の外に別に至誠心を起すものだと、これは大きなる心得違である、これを牡丹餅流の心得と云ふのです、御承知の通り牡丹餅は片方に暖い御飯を握り、片方の餡に丸けて製るのであつて、恰もその如く、助け玉への握り飯を至誠心の餡に丸けるやうに心得ておる、決してそうではない、助け玉への外に別に至誠心と云ふ異体はない、助け玉への姿が、卽ち至誠心であります。

安心は助け玉へより外になし

鮪の喩

捨子問答に

凡そ三心といへばとて、別々に三度起すべき心にてはなきなり。

とあるのが明かな證據である、だから前にも申した通り。淨土宗の安心は助け玉へより外はない、鎭西上人が『淨土宗最要の一言は助け玉へなり、辨阿は口に云ひ心にも想ふなり』との給ひ、三祖記主禪師は『實なるかな此の言賢なるかな此の心仰いで先師の口訣を顧るに落淚千行なり』と感歎あらせられた、二祖の言三祖の仰せ甘味しても甘味しても尙つきざる泉の如きである、念佛の行者肺腑に藏めて忘れてはならない、須らく日に三唱すべきであります、助け玉へ南無阿彌陀佛。

其二

成唯識論の中に、お互の心を鮪に喩へてある、京都大阪の市內にお住

の人は御存じないかもしれぬが、私のやうな田舎者は鰌とは因縁が深かうあります。俗に田舎者を泥臭いと申しますが、その泥中に鰌がおります、カバ焼にしたり鰌汁などにします、私は魚は好物であります、こんな事を申せば、此生臭坊主と思召すかもしれませんが、矢張り罪に垢れた生臭坊主であります、賢善精進の聖僧大徳から御覧したら佛弟子の仲間へ入れぬと仰しやる程の罪深者です、そんな淺間しい私でも、鰌汁だけは、能う吸ひません、髯をピント張つた儘、汁の上に浮いておるのを見ると側隱の心やら同情の念やらなんぼ甘うても吸ふ氣になれませぬ、魚料理も種々雜多にありませうが、鰌汁程殘酷な無慈悲な料理はありますまいとおもふ、計らず餘談に外れましたが、唯識論の内にお互の心を鰌に喩られてある。

鰌は御承知の通り田や池にジットしてゐる時は、水は澄み切つてゐます、然るに人の足音地響が聞こへますと、身を隱すために泥の上で跳り遁れるから水を濁らすものです、丁度お互の心も、ジットしてゐる時には鰌のそれの如く心水は澄み切つておるものであります、然るに名聞の足音、利養の地響が聞へますと、直に心田は虚假不實と濁るのであります。

林の本性は元來靜であります、その靜の林を動かすものは即ち風であります、水の本性は元來清いものぢや、それを濁らすのは泥が混するからである、お互の本性『性は善なり』『一切衆生悉く佛性あり』で、正しいものであります、此の正しき心を邪にするのは慾があるからである、慾と云ふ鰌のために心水は絶へず濁亂しております、佛さまは此慾を離れておる、故に離慾尊と呼ひまいらず、この故にお互の心が常に至誠であるためには、慾を離れねはならぬ、尤も慾と申しましても、正慾と邪慾

となりまして、捨てよ離れといふのは邪慾のことであります、正慾は深いほどよい、大きいほどよいのであります、佛さまは正慾の深い親玉であります、邪慾が悪いものであり、捨つべきものであり、離るべきものであるとの考は、何んな人も思ふて居る所であります、本日の參詣人も男女老若高下の別はありましても、よもや邪慾が可いと思ふ人は一人もあるまい、捨てられるものなら捨てたい人はかりちやが、何故に離れることが出來ぬでせう。

赤穗の義士四十七士の忠誠義烈は、一人として鬼神を泣かしめ天地を感動さしめざるはない、これ私を棄てゝ先君のために一命を捧げたからであります、赤穗の義士傳は聽く度みる度に感じはするが、さて私慾は離れ難い、どうすれば此慾を遠離することが出來るでせうか、眞實至誠が倫理道德の根本であることは異論はない、唯如何にしたら至誠であり得るか、大なる肝要の問題であります、それにはどうしても信仰に依らねばならぬ、その信仰とは助け玉へである、助け玉への大信心は、代言すれば佛に面接するの信心であります『佛さまと差し向い』の信心であるこれ程の至誠がまたと世にありませうか。

佛さまと差し向ひ

佛さまと差し向い、何んと云ふ良い境界ではありませんか、お互夫婦の間でも、夫婦の仲良い時には何時も差し向いであります、火鉢を挾んで差し向い、子を仲に差し向い、膳を挾んで差し向い、茶器を挾んで差し向い、酒德利を中に差し向い、一家團欒の和樂、差し向いの中に籠りなりだ、それが一つ間違ふと、さあ大變女房はクルリと背向ける尻向ける、亭主も立つて後をむける。

近かりし夫婦の仲も遠くなり
尻こしりとで八里こうなる

夫婦差し向い許りが平和ぢやない、親子差し向い、君臣差し向い、兄弟差し向い、主從差し向い、何れも皆眞實の存する所だ、兩手が差し向へは合掌となる、合掌をせられてみよ、怒髮天に逆立つ程立腹して唯一刀と振り上げても兩手を合せられて見りや、上げた劔も下がらぬぢやないか、親切がなくては一日も社會的の生活は送れませぬが、その親切も差し向いの心に過ぎない、慈悲も同情も、憐愍も要するに差し向いの心であります、病人と差し向いの心になつてこそ同情があり理解がある、同病相憐むといふのも本當の差し向いになり得るからであります、赤貧洗ふやうなお方に差し向いすることが出來たら金ある人は默つては居れますまい、妻は病床に泣き子は饑に泣く不幸の人に差し向いしたら援助せずにはおれますまい、偉なるかな差し向いの功德、況んや、願王如來と差し向い、飽こことなきみ佛の護念を蒙る、何んと結構な身上の悅びではありませんか。

危く慾と差し向ひにならんとせし紳士

此の佛と差し向いの心を、妻に向け小供に向け親に向け、家に及ぼし村に及ぼし、國家社會に及ぼす生活が、正義至誠の生活である、た互念佛の同行はかくの如きの功德を成就せねばならぬ、これが佛作佛行である、菩薩の波羅蜜で念佛の顯現であらねばならぬ。

三河國岡崎驛に於て、一人の紳士が惶てゝ人車より飛下りて西行の終列車に乘らふとした、どうした時計の間違か發車迄には未だ三十分餘ある、これならあわてるのてなかつた、マア良い、早い方なら乘り損ねはないと、一二等待合室へ入つた、今晩は云何したものか、一二等待合室はがら明きだつた自分獨り、話相手はなし時間はある、致方がないから備へ附けの新聞雜誌それからうれへと通讀してゐた、時間は未だ充分ある氣を靜めて讀み出した、だん〳〵剝つて行くことはそも云何、金光燦

たる金指輪の上等がころりと出た、オヤ金指輪幸此室に人はなし、果報は寝て待て牡丹餅は戸棚金の指輪は茲にある、どれ貰ふておかう、四邊を見廻し乍ら懐中へねぢ込んだ、何喰はぬ顔で元の雑誌を讀み出した、所が人の心は不思議です、今の今迄は、心が平靜であつたから、見れば見ただけ合點が入つたが、今度は心が平かでない、ドキン〳〵と胸騒はぐ、何んだか心がザワ〳〵する讀んでも解からぬ、見ても頭へ詰まらぬエー見なくてもよい、時計は未だ二十分ある、どれ室内を散歩しようと二歩三歩うろつかしたが胸中は早鐘のようだ、その早鐘の胸底より

うれは汝の物ならず、必ず落し主があるに違いない元の所へ返してけ。

そうだ實際俺れのものぢやないのだ、どれ戻ろうかいや〳〵切角棚から牡丹餅だもの、奪つたでなし、盗んだのでなし、矢張り貰ふて置かうそれは汝の物ならず、必ず所有者があるに違いない、元の所へ返しておけ。

そうぢや俺の物でない、返へそう、いや返へすまい、では濟まぬ、いや濟むもすまぬもあるものか、時計はもう十分ちりん〳〵は鳴り出したさあ乘込まねばならぬ、取るなら今、返へすなら今、如何うしようと、道の紳士も散散迷ふた、いや俺が悪かつた、返して置かうと元の雑誌に挿げて、直ぐさま改札口、名古屋行と切符を出そうとすると、後ろにカチン〳〵と劔の音がする、ハテナと回顧すれば、赤い衣服の獄人が巡査に連行されて夜行に乘込むのであつた。

おゝもしも俺が、あの金指輪始のように懐中なしたら、今の囚人は他人の事でもあるまい、あゝ良い事をした、これ全く平素に信心する阿彌陀如來の御蔭であつた、南無阿彌陀佛と念佛の聲と共に車中の人となら

れたこいふことを傳聞しております。

是れにつけて考ふるに、慾と差し向いになつたときは、教養ある紳士でも、金指輪を懷中して果報は寢て待てと喜ぶのであります、さり乍ら胸底の佛性、信心の催促に遭ふては、佛と差し向いになる、この秋、與へらるゝ宣言は

それは汝のものならず、必ず落し主があるに違いない、元の所へ返しておけ。

であります、此信心の催促に引き立てられた、本性の吾れ、至誠に立ち復つたとき、眞實の念佛が出づるのであります『念佛のみ聲と共に車中の人』これがお互の日常でなければなりませぬ、眞劍の心とか眞面目とか、眞摯の態度などゝ申しますが、念佛を離れての眞劍なり、助け玉へを除いての眞面目なら、唯名ばかりの話であつて要するに空論に過ぎない、梵網經に『一切の戲論』とありますが、信根を切り離しての眞實や至誠なら要するに戲論であります、これが法然上人を信する私達のいつでもの立場であります、そしてこれが法然上人の示めされ玉ふた有難いみ教であります。

其三

應舉幼兒の畫

丸山應舉と云へば前古無比の名畫師であります、それ程の名人だから逸話も隨分にある。

或時、二三歲の小兒に母親が御飯を喰はしておる畫をかいた、出來上つて見ると小供も親も、その周圍の背景も天眞無垢、吾れながら感心する程の上出來であつた、此の眞に迫る繪を世人は何んと評するであらふその世人の批評を聞きたさに表裝して店先に出して掛けておいた、なに

がさて都の事だから、毎日幾百人の人が通りかけては其の繪を眺め皆が皆な上出來だ生き寫しだと褒めぬものは一人もなかつた、應擧大先生人の眼は違はぬものぢや筆者の私が恍惚と感に入るのぢやから、世の人の稱讃するのも無理はない、入神の筆とは盡し恁んなものを指して云ふのだろうと、私かに悅に入つてゐた。

ある日のこと、赤毛布の田舍爺さん。本山詣りの次でに京見物、折しも通りかゝた應擧の家、幾十人の男女が立つてワイ〳〵してゐる、何事かと爺さん屋内をのぞき込めば例の繪が掛かつておる、成程見れば立派なものだ音に聞いた應擧さんの家はこれか、親といひ子といひ一點の難がない、がこの母は繼母だなー、これを聞いた奥での應擧、これは不思議、繼母とは俺れはそんなつもりで繪いたのぢやない、何人なればこそかくは云ふのであらうと出て見れば例の赤毛布、これはとばかり二度驚

愕だが、さあらぬ態で奥へ請しさて云ふよう、私は應擧で御座る、貴殿は何所に見所があつて繼母なりと仰せになるか、何卒その理を承り度いと賴んだ、爺さんも當惑顏に、私は御覽の通り田舍物、繪なぞは丸で素人、お氣に障つたらお許し下され、だがあの繪ではどうやら繼母らしいなぜと云ふ、御覽なさい、赤子は口を明いて居るのに母の方は口を塞けてゐる、あれが本當の母なら御飯を喰はすのに、先づ母より口あいてアと云はせながら、箸で食べさせるものです、それに何んぢや口塞いだ儘で食べさせる母ならば、親切が充分でないから繼母かと存じますと答へた、聞いた應擧も深く感じて禮を厚くして饗應したそうです。

誠の有無は僅かの所で別れます至誠の有無も亦ほんに僅かの所から虛假不實と流れ出すのであります

茶人の宗匠千の利休、これ又非常な名師であります、利休一日茶室に

入り釜の沸音を、松か、潮か、琴か、鈴かのように耳にしながら、小香爐を取り出しては眺め、置ては見詰め、手に取つては眺め、舍ては考へ頸をヒネツて又うなづき「隨分面倒なものぢや、茶人は得て斯うしたものだ」眺めては味、味つては眺めて數時間を知らずに費した、妻の宗恩靜に茶室に入り來たつたが、利休のさまを見て一語も發しない、すると利休が、此の小香爐は今朝人の下されたものだが、まあこれを見よと云ふ、妻の宗恩も眼を香爐に留めた、左視右視、久しうして、面を夫の方に向け、釉と申し、形と申し、心よき作です、されと此脚一分高過ぎると思付きなされて居るのではありませんか、利休聞いて驚きお前へも爾が思ふが、私も左思ふてゐる、誠に一分高過ぎますと二人が靜な茶室で茶道を味つたと申します。

皆さんこうです、妻がこれ程迄に夫を理解してゐたら家庭の理想境で

仔細なき處に仔細をつける

はありませんか、それは兎も角、高いと云ふた所がたつた一分、氣のないものから云へば、そんなことは殆んど問題にならない、なれども志をその所に運んで居るものより見れば、一分の高さが大問題になるではありませんか、極理は必ず一つです、妙着は必ず二つとはない、一者至誠心の眞實、僅かに間違へは、諂曲、奸詐、虚假、不實となる、應擧の場合、母が口を明く明けぬ利休の場合一分高い低くい、ほんに僅かの事です僅かの所に道の妙處がある、今淨土宗の安心もそうである、助け玉への大信心に住する時は、此心即ち大至誠心であります、これが即ち往生淨土の願心であります、此外に淨土宗の安心はない。

仔細なき所に仔細を付くる時、往生の道にはそむくなり。

法然上人の誡め曷こして日月の如くであります、にも拘らず人の心はヒネクれてゐる、仔細なき所に仔細を付けんとし、文句なき所に文句を云

繼子のヒネクレもの

はんとし、白色に何か染めようとする、一寸見れば染めたが可きそうに見る、久しくすれが嫌が來る、嫌やがられるに拘らず、人間はトカクひねくれたがる、今誠のためにヒネクれた話をしよう。

去る所の繼母に……此席は能く繼母が出るが……十二歳になる繼子に七歳の實子との二人があつた、我が子は可愛いが、人の子は憎い、自分の子は眼に這入つても痛くはない「此子死んでも墓へはやらぬ、燒いて粉にして湯でこねて、黄な粉團子にして喰べる」ほど可愛いものです。

丁度一匹の魚を買ふた、我子には一番好い所が澤山につけてある、繼子にや魚の尾の所だけ、それを眺めた兄の繼子あゝ悲しい、もし眞實の母が在したらと、心内では想へども、まさか口へは出されもせず、苦しまぎれにヒネクツて見た、お母さんは有難い、往末私に物の王になれと魚の尾をつけ下されたと、聽いた繼母智慧がないと見にて、本當に受

眞宗との比較

け、なに物の王、そんなら今度は我子に尾をつけてやらうと、二度目の魚の時は、繼子に頭だけ我子には好しい所と尾をつけた、親のない子は何地でも賢い、それを見た繼子は、例の如く酷いとは思ふたが、又ヒネツた、お母さんは有難い、私が將來物の頭になれと云はぬばかりに頭をつけて下された、繼母、こりや大變と、三度目には我子には王になるように尾と、かしらになるように頭だけつけて、好い所は繼子につけた云云かしらの頭や王樣の尾よりも正味の所でなくてはならぬ。

淨土宗と眞宗の二つを比較して見ると、眞宗はヒネツてゐる一寸聞けは面白味があるやうだが、實際問題の往生になると、ヒネらぬ淨土宗の安心でなくては參られぬ、眞宗はヒネツた繼子の言葉のやうなもの、我淨土宗はヒネらぬウブの弟のようなものぢや。

西山上人は白木念佛と說かれた、念佛は白木がよい、定散の色取や、智惠學問の色取や、虛假不實の色取りや、自力我慢の色取は、總て念佛を色取りヒ子ツたのだ、其身其儘其機のなりで、唯南無阿彌陀佛と念佛を申すのが、即ち白木念佛であつて、始めて佛意に順し佛願に相應し、佛敎に隨順すると勸められてあります。

されども人の心のすなほならぬより、やすき念佛に癖の付きぬるこそ返す〳〵本意なく覺ゆれ。

此の歸命本願抄の御言葉は今も古も空谷の跫音のように注意すべきであります、皆さんや私は自分自分の心から、念佛に癖をつけておりますまいか、別して近代人の念佛の義雜花亂漫とでも申しませうか、自己流の念佛が多くて、癖も癖も大癖で、癖と糞クソと音が能く似て居りまするが、音だけでない實質も能く似ております念佛の大癖でなくて念佛の大糞であります、今や

開宗七百五十年の記念の瀨戸際に立つて、これ等の大糞を一洗せねばならぬ、糞は肥料になるか、念佛の大糞は淨土往生の肥料にならぬ、かゑりて天魔波旬の肥になる、靜に開宗の祖恩を追憶すれば、念佛の白木に復古せねばならぬ、情見を加味せる癖より脫却して、假令一代の法をよく〳〵學すとも一文不智の尼入道の無智の身に同じうして智者の振舞をせずして、唯一向に念佛せねばならぬ、それが智者の振舞の念佛、これが今の人の大癖であります、東も西も辨へぬ法然房が念佛して往生する也の祖師の芳跡と近代人の態度を比較すれば天淵の差であります、眞實淨土の行人よお互は祖師上人を見習はねばならぬ、これを見習ふて、たとひ地獄に落ちたりとて、更らに後悔ないではありませんか、その故は法然上人と共に地獄で一緒に棲めるからであります、念佛申して地獄

念佛の大癖

へ行くか、極樂へ生るゝかは、法然上人に丸任せ、唯如來の願力を賴りに念佛の生活を送らふではありませぬか、少々話が脫線をしました、得手に聞き勝手に行ふて、易き念佛に癖をつけぬようにせねばならぬ、無くて七癖有つて四十七癖と、癖は取り除き惡いものです、餘事に就ての癖は兎もあれ角もあれ念佛だけは癖をつけてはならぬ、その念佛の癖と云ふは

或は我樣の惡しきに泥み、或は信心の深からぬことを嘆き、或は妄心の起滅を諍ひ、或は學問の有無を論じ、或は持戒端坐してこそと思ひ或は三萬六萬ならではと執し、面々の心の引くに任せつゝ、よしなき論に日を暮し空しき悔に夜を累ねて、念佛に勇みなく、往生に疑をなす、皆これ自刀をのみ顧て他力の謂れを解せざるなり。

これ等の風情を切り脫けて、唯ほれ〳〵と念佛に勇みませう、もし助け玉への本心より遠かれば、遠かる程、念佛に癖がつくのであります、恰も電光を去れば去るだけ光が薄うなるやうなものです、助け玉への根本の心に立ち還つて念佛申す時、一切の分別は皆な戲論である、さればお互の癖を治す重病者の阿伽陀藥の靈藥は助け玉への本心であります、これが

癖を直す靈藥

すなほなる念佛である。

此の愚直の念佛の聲の下に常に在るのが至誠心であります。

第五、二者深心

其一

今席より、二者深心のお話に移ります、此深心は

二者深心

淨土宗の眼の玉で、一宗の要義は此の深心に籠るのです、それで、三

心の中、何れが輕重、何れが必不必かと云へば、三心皆大切で、其中輕重要不を論ずべきものではないが、しかし要中之要は三心中何れかと申せば、二者深心と仰せられてあるから、注意に注意して、聽聞せねはならぬ。

誰しもお寺へ參る程の者は、淨土安心の正意を皆得たつもりの人ばかりぢや、得たつもりぢやが、法義の鏡に照らしてみると、存外片輪の安心が多い。

さる人が、村外れの橋を渡りかけると、堤に一疋の野狐が頭に枯芝をのせて飛んで居る、ハア是れは己を化すつもりぢやな　人「コラ狐己は汝に騙される樣な馬鹿作ではないぞ」狐「如何しまして、彼方なぞを騙そうとは夢にも思はぬ、實は此先方野中に一軒屋がありませう、それに老夫婦が住んでおりませう。あれを私が騙そうと只今支度中です、貴下見

に來てはどうです」人「それは實に面白い」狐「此の枯芝を頭にのせて一飛すると綺麗な娘になります、此の竹皮に馬の糞をのせると饅頭になります」人「フンこりや面白い、よい見物ぢや」と、化けた娘の後からノソラ〳〵附いて行くと、果して野中の一軒屋　狐「モーシ此家です、私は表口より這入りて、此馬糞を老夫婦に喫さすから、貴殿は裏の窓口から御覽あれ」人「よし〳〵承知」と窓から視ておりますと、表へ廻つた狐、門口明けて、伯父さん御免　老「オー誰れかと思へはお前はテルか　狐「ハイてるです、長く御無沙汰して濟ませぬ、コレハ途中で氣附た土産、お口にあいますまいが、ホンニ私の心迄で」老「コレハ毎度有難い、ソレデハ早速と」兩人は喰ひ出した

窓から視て居た男、ア、面白いと、飛立つ樣に觀ていると、後ろより村人「コラ吉公、藪垣へ頭をツ込み何しておる」人「何に窓から狐の化か

すを見て居る、アラ面白い」村「ナニ窓も狐もあるものか、性をつけろ」と、ウント打つた 人「ア、痛い」と氣附て見れば、今迄の家も娘も老人もなく、頭を藪垣にツ込んで飛んで居た、化かされぬつもりで化かされて居た、今も其通り間違いなく、安心の正意を得たつもりでも、經説や祖説の御手をもて、安心如何かと打たれたら、藪垣安心かもしれぬ、注意すべきは此事であります。

藪垣安心

全体淨土宗は何から開かれたかと申すに「二者深心」の一句から、淨土他力の一宗が開けたと申すのです、して見れば、實に廣大甚要なは、此の一句の四字であります、今は此の深心のお話ちやから、浮心を驅除して聽聞ありたい、眠てならぬぞ。

深く信ずる心

さて「二者深心とは、深く信ずるの心也」何を深く信ずるかと云へば佛願難思の他力を深く信ずるのであります、智度論の中に「佛法の大海は、信を以て能入となす」佛法の門内に這入るのには、信がなうては入られぬと、龍樹苦薩の仰せがある、早い話が、今日此本堂へ、各々が參て来る、別にお寺へ參る時間がある譯ではあるまい。家に居れば、人並に爲すべき仕事は澤山あるが、切角お寺で、有難いお説教の勤まることちやから、後世の一大事を聞きたきものと、仕事や用事を其儘にして、御參詣になつたのも、信心の足があればこそ、此本堂に參へれたのちや信心の足で、本堂へ參るばかりでないぞ、信心の足あればこそ、不斷煩惱得涅槃と、極樂淨土へ參るのです、參つた時のうれしさ目出度さは、如何なでせう、追付けれ互は、此の樂みに出遇ふのちや、これが往生初快樂である、か様な華報を享るのも、源は二者深心より來る、此故に選擇集に「生死の家には疑をもて所止とし、涅槃の城には信を以て能入となす」と仰せられました、所が、お互の心内を顧みるに、信心の根は極

疑ひの老婆

めて淺くして、疑煩惱の根は牢として拔き難い。

或處の信者の老婆が、疑一つあつた故に、生死輪廻の古里に、長住までいした事を承り、我が胸の疑に使を出した、其使の言葉に

疑よ暫しそこをばのいてたも

そちが居る故信がにられぬ

此の使を受取つた疑が早速婆へ返事した。

疑に今更のけとはそりや無理ちや

二世や三世の中ぢやないもの

一念迷ひし其始めより、常に疑を友として、千劫萬劫恒沙劫共に暮した仲ぢやから、疑の抗議も無理はない、婆さん、これではならぬと、再び

疑に今更のけぢやなけれども

そちが居る故參られぬげな

コレデ疑が穩かに立退くかと思の外

無量劫お世話になりし私故

お邪魔ながらも連れてゆかんせ

疑の返事も中々澁太い、此澁太い所が、お互の根性其儘ぢや、人は向上にも限りがない、兩親が赤子を、甘へさすると、甘へるに極度のない、と云ふことです、今末法五濁の私共が、大悲の本願にあまへつくのはよいけれども、それを良い事にして、淺間敷く甘へつくの心がある、それは如來の本願は、惡人目當ての本願なれば、欲起しながら、罪造りながら、妄念起しながら、煩惱有りながら、猶御助け下され候御本願ならばモーつまけて、疑ながらも助け下されては如何と、虫の好い澁太い根性がある、なんとあきれたものではないか「お邪魔ながらも連れてゆかんせ

」の心根がある、如何に不簡擇平等の大悲とは云へ、疑ひながらも迎にんと云ふ誓はない、此の返事を得た婆は、もう耐に難くて、最後の通知した

疑よ是非にのかずはそこに居れ
そちにかまはず念佛申さん

賢哉此言、宗の肝要は此一言にある、念佛は疑の晴れて後、申すものと思ふてならぬ「彌陀賴む人は雨夜の星なれや、雲晴れねども西へこそゆけ」念佛は妄念、妄想を無くして後、稱へるものと思ふてならぬ、念佛は、貪瞋煩惱を滅して後、唱へるものと思ふてならぬ、疑があれば、疑の中から南無阿彌陀佛、妄念妄想が湧出るなら、湧き出る其中から南無阿彌陀佛、貪瞋煩惱が起きたなら、起きる其中から南無阿彌陀佛、申す内には自から、誠の心の現はるのが佛願難思の善巧である「疑よ是非にのかずはそこに居れ、そちにかまはず念佛申さん」一切の者にかまはずに、念佛申すが、淨土宗の秘訣である。衆生貪瞋煩惱中能生清淨願往生心、貪瞋煩惱を取除けて、清淨の願心を起せと云ふのではない。

これにつけて有名な物語がある。

高野の明遍僧都は三輪の大學者であります、鎭西上人のお言葉に依りますと、法然上人と高野の明遍僧都と、大原の顯眞座主が、天下の大上人であるとあります、此明遍僧都を有智の道心者と世間の者が云ふたそうです、私は此の言は注意をせねばならぬとおもふ、兎角古も今も同じことで、智者は道心がなく、道心あるものは智惠がないものです、お寺參の其の多くは道心はありますが智惠がない、智惠あるものはお詣をせぬ、お坊さんも矢張りそうぢや、智者方は道心がなく、愚僧に道心あるが智惠がない、牛の角のように兩方揃ふたお方は、在家も出家もあり惡

いものです、爾るに明遍僧都は有智の道心者、鬼に金棒のお方である、故に鎮西上人も天下の大上人とその人格を稱へられてたります。

始め明遍僧都、選擇集を披覽して念佛の信者になり玉ふたが、未だ奥齒に物のはさがつたように、眞の安心には手が屆がす、何やら不足氣の所があつた、おりしも丁度、法然上人が天王寺におはしたとき、僧都善光寺參詣の次でに立寄つてお尋になつた、そのおりの問答が實に有名になつております、此頃山鹿素行の山鹿語類を見ましたら、此問答がのせて素行も感心しております。

明『このたびいかゞして、生死を離れ候べきや』

法『南無阿彌陀佛と唱へて、往生を遂るにはしかすどこそ存候へ』

明『たゞし念佛のとき心の散亂し、妄念の起り候をは、いかゞ候べき』

法『娑婆に生れたもの、心あに散亂せさらんや、煩惱具足の凡夫、いかでか妄念をとゞむべき、その條は源空、も力も及び候はず、心は散り亂れ、妄念は競ひ起るとも、口に名號を唱へなば、彌陀の願力に乘じて決定往生す』

明『これうけ給り候はんために參りて候』

ど初對面にも拘らず一言も世間の禮儀の詞なく退出せられた。

此の有難い御問答を承つてお互の胸を晴らして貰はにやならぬ、妄念や煩惱は、その條は源空も力及ばずぢや、唯只南無阿彌陀佛が口に在るかないかゞ眞先の用事である、妄念や煩惱がある爲に念佛が邪魔を受けるのでない、妄念妄想があるために、返つて念佛が引き立たねばならぬ

此の泥があればこそ咲け蓮の花
此の罪があればこそ咲け信の花

心の塵芥垢障を取去りて、念佛申すではない、煩惱起らば起れと振捨

てゝ、若し振捨てること能はずば煩悩起らば起る其中から、「南無阿彌陀佛と稱へるのを、淨土宗徒の振舞である。

更に嚙み碎けば、自ら起した心の安心を力に往生を憑むなよ、自から口に稱へた念佛を力に往生を憑め、異香よりも、紫雲よりも、念佛の聲に過ぎたる往生の記しやはある、聲につきて、決定往生の思をするのを二者深心の姿と云ふのであります。

つまりは、そちにかまはず念佛申すのである。

『我志の強からんよりは、佛の願力の強からんこそ頼しかるべきに我志の弱ければとて、佛も如何と危ふむは、願力をいやしむるになるぞかし』(本願抄)

サア、願力をいやしめてはなりません、田地や屋敷はなく、食ふに困つた其人でも、他人から見頸られた、いやしめられたと思へば、腹を立てるが世の習です、阿彌陀如來の願力を賤しめたとて、如來は立腹なさらぬけれど、超世大悲の本願を、凡夫底下の身を以て、賤め奉ることは、何んたる淺間敷い事ではないか、早く、兎角の計は打捨てゝ、強き本願に縋るのを、名けて深心と申すのです、その縋つた形が聲に現はれて、南無阿彌陀佛と響くのであります。

あさましと詑ふる許りを手向にて
稱ふる外のことはあらじな

其二

是れにつけて二の信あり一には自身は現に是罪惡生死の凡夫曠劫より このかた、常に沒し常に流轉して、出離の縁あることなし。二には、彼阿彌陀佛四十八願をもて衆生を攝取し給へば、疑なくうらをもひな

く、彼の願力に乘じて、さだめて往生することを得んと、信ぜこいへり』

さて、二者深心の「信」とは、全体如何ようなものか、四角か、三角か丸いものか、信心の氣分は如何様なものと、一歩深入りして來ると、婆さん達の心はフラ付て來る、左様な風では覺束ない、それではならぬから、西要鈔の中に

『阿彌陀佛の本願のたのもしきが、即是信心也』

とある、是ならお互に能く解る、是れで心が落付かずは、落付き様はない、信とは六つかしいものでない、本願のたのもしきが、即信心である、若し吾心に一念本願の頼しき心があるならば、信心あると思ふてよい、もし本願が危なげに思へ、又吾心に何ともこたへかなくば、無信の輩ぢや、至心に懺悔すべきです。

後始末

信とはマカス也

かく、本願が頼もしくなつた互は、其頼もしくなつた後は如何するか、物事は後始末が大事ぢや、若し雪隱に參つて、後始末を忘れたら、それこそ怪態なものさ、法事、祭禮、家事惣して後始末が肝要ぢや、今已に本願頼母敷く相成つた其後始末は、此身を本願に任かするのです、「信トハマカス也」眞實に佛願に此身を打任せる、是れが淨土宗の信心である、若し頼母しいとは申せ、身を佛願に任せ兼ぬるようでは、それは眞の頼母しいでない、例せば親爺さんが、息子が漸次生長し、眞に頼母しくなつたら、家事全體の事を、擧げて任かする様なものぢや、それを、口先では、兄は感心ぢや、頼母しいと云ふて居ても、死ぬがしぬ迄頑張て、家事を抓きまぜて居てば、本當の頼母敷とは申せまい。

既に阿彌陀佛の本願を聞き參らせて、佛願たのもしくなつたら、一切此身を本願に任かすのです、尤も是れが人間に任するのであるなら、な

信とはもたるゝなり

んぼ自分の實子でも、人間相手ぢやから、任せかね悪い點があろうかなれど、四十八願の法王、正覺の阿彌陀様に此身を任かするのですから、吾に取つて何の不足がありませう、爾るに貪瞋煩悩に罣へられ封ぜられて、兎角に本願に任せかぬるから、歸命本願抄に

『されども凡夫の習として、此身を本願に任せかねたる淺ましさに、暗き迷には入りぬべし』こゝらがお互の心の有様です。

又、或大徳は『信とはモタル、也』の解釋があります、いかさま、物に凭れた程安樂の事はない、殊に疲れ草臥れた際に、何かに凭れたならば、其心地は好いものです、靜に以るに吾等六道輪廻の長旅にて、草臥れ果てた此體、何處をたよりのしらま弓、十方淨土には門戸を閉され、諸佛に捨られた三界の迷兒を、勿体なくも阿彌陀様は、超世の願を起し給ふて、我十八の本願に凭れて吳れよの呼聲に、アナ有難や勿体なやと

第一機を信ずる

本願の杜にもたるゝのを、信とは申すのであります（中に賢い參詣の人は杜に凭れて聽聞し、大口明て居眠る云云）

『まかす』と云ふも、『凭るゝ』と申すも、言葉は違ふやふですが、詮じ詰めは同じ義理で、信ずればこそ、任せもし、凭れもするので、信心の有様を釋した迄であります、それで、今は話の都合上『信者まかす』の方でお話を進めたいと思ふ。

皆様、信とは任せることは前辨の通りですが、此の任せると云ふ事は易きが如くして其實易きでない、毎日々々三毒五欲の煩悩に刈立てられて、娑婆三界の事に心が留り、なか〳〵如來様に此身を任せ悪い、是所を善導大師御心配下されて、此身を任せるのには、先其の前に、自分の身柄を考へよ、自惚や、掛値や、自慢を脱ぎ捨てゝ、裸にしたその吾を考へて見たら、自身は現に是罪悪生死之凡夫、曠却より已來、常没常流

足らぬを物の始め

轉ど勘付くであらう、かゝりける身なればこそ、諸佛の化導に遇ひながら、今迄迷を累ねたれ、此の如き身は極樂よりは外に縋り道がない、かゝる身も、御助け候へと、始めて任す氣になれます、是を第一信機と申すのです、信機とは自分の足りない事を、自覺自認自證するのです。

水戸樣の或一代の藩主の時、正月元旦お祝儀の膳部を、膳係の者が、吟味に吟味して進上した、誠に平素と違ふて元日の事ですから、左もありそうな事です、然るに如何したものか、汁椀に汁が入れてなかつた、そこで、厨夫膳係家老も愕然惜く所を知らず、日出度かるべき正月元旦に此手落、どうせ手討か、割腹か、追放かと、互に額を鳩めて心配した時に殿の述懷に

汁一つなくても飯は食へるなり
足らぬを物の始めにはして

參詣の不足

此歌尤も有難いと思ふ、別して『足らぬを物の始めにはして』の一句意味の深い樣に思ふ、今の人は、これから見ると非常に贅澤に流れて居る、時節が違ふとは云ふものゝ、御互に謹慎せねばならぬ、婆婆は既に忍土と申します、忍ぶのは元と足らぬからです、何も不足がなくば、忍ぶ必用もありますまい、智慧不足、德不足、錢不足、食不足、親切不足參詣不足、或る御說敎師が、某地方へ出掛けた所、婆が四五人の外、參聽者がない、餘りの事に、一句詠んだ。

よれかしと思ふ參詣は寄らずして
しはくちや婆の顏によるしは

これを下で聞いた婆さんも、御轉婆とみへて默つてゐない、すぐさま

長かれと願ふ壽はみぢかくて
へたな說敎のお座のながさよ

と返歌した、お寺さんは參詣が寡いと不足をいひ、別けて説教師は參詣のないのに鬼面し、參つた婆さんも、長かれと思ふ壽命は短くて、聞く説教のながく〳〵しきに痺を切らす、參たものも參らしたものも共に不平を云ふ世の中ぢや、今日は説教の聽聞に來たのだ、小言に來たのぢやない、だから乞ひ願くばお寺さんも參詣人も、本日一日の説教日だけは、不平なしにせやうでないか、だがこれは外國の話だ、本日の參詣人は何れも皆佛さまばかりぢや。

誠に殊勝の事です、けれども世の中は萬事不足が習いぢやから、汁一杯位足らぬからとて心配せぬな家中のものと、お慰め下された殿様の心掛は、お互の良き手本であります。

たらいよりたらいに移る五十年
經帷子が婆婆の給金

欲の爲めに身を亡す

法華經に、諸苦諸因貧欲爲本とあります、お互は欲の爲に身を亡す、昔し或處に盜賊が三人集て、互に働で來た贓物の分配を始めたが、處が大分腹が空いたから、餅なりと買て食はふではないかと、仲間の一人、其餅買に出掛けた、途中考へるのに、今日の贓物を三人で別けては分配が寡ない、コリヤ計略を廻して、此餅の中に毒を入れて殺害し、彼を我一人にて獨占せんと、途中藥屋の番頭を胡麻化して毒を求め、それを餅に入れ、自分のは記しを入れて喜乍ら皈へつて來る、さて居殘の二人もさるもの、待てよ、是れを三人で分配しては得分がない、一人分を多く得ようでないかと、遂に使の歸る道に待伏せして殺す相談が煮にた、それとは知らずに餅買は、今しも森にさしかゝると、二人は不意に氷の刄物引拔きて、物の見事に殺害し、さて一休みに、此餅でも食はふと舌鼓打ち乍ら食ふたが、元より毒の爲に二人は血を吐て死んだ。

足らぬことに氣をつけよ

世の中はたらひでくらせすみ衣
物干さほの欲にかゝるな

オ、話が横に外れましたが、今、善導大師の御思召は、錢が足らぬ、智惠が足らぬ、と此世の事を慨くのちやない、此世の事はトモカクモ、今度生死の一大事、往生淨土の善根功德に付て、其の足らぬ事に氣をつけよの御化導であります。

他力信仰の發足点

一年三百六十五日、これぞ菩提の因ちやとて、眞實に御經陀羅尼も讀みもせず、修行いたした覺ゐなく、其上日夜に造る罪咎は、よもや舟にも車にも、積盡されぬ業煩惱、姿は人に似たれども、心の中は鬼神の如く、額に角ははねども、背に鱗はなけれども、心の底は角も麟も大蛇にまけぬ、此淺間敷身上ちやから、未來行先を思へば、身の毛も豎つ、されば、こそ、的切り御互の身上が正に自身は現是罪惡生死之凡夫、常沒常流轉の當機であります、此の、自覺、自認、自證、自感が他力信仰の發足点であります。

是の如く、自身の身柄に氣がつけば、如來に縋るより外に道はありません、其の縋り方は

『二つには、彼の阿彌陀佛四十八願をもて、衆生を攝受し給へば、疑なく裏思なく、彼の願力に乘して、定めて往生せんと』

コレヲ第二の深信と申すのです

織る者進み耕す者退く

其　三

續きまして深信のお話を致します

呂氏春秋に『織者進耕者退　其成功一也』是れは女中衆が機を織る時は次第次第に前に進んで行く、農夫が田を耕す時は、段々と後へ退く

聖淨二門と進退

前に進むと後へ退くとの差はあるが、一匹の絹を織り、一反の田を耕した所は、其仕事の出來上つた功は一と云ふ心であります。

聖道諸宗の自力の修行は、貴已等佛、何れの所に、天然の釋迦自然の彌勒あらんや、釋迦も人なり吾も人なり、修行さへすれば同じ事ぢや所謂、眞言の父母所生身即證大覺位、天台の初發心地便成正覺、禪宗の直指人心見性成佛、此等の樣に自分を進んだものとするから、織者は進む樣なものです、我淨土門は全く夫れとは違いまして、罪惡生死之凡夫と後退り、出離無緣と一と下り、常沒常流轉と見下げたのですから、丁度、農夫の耕者は退く樣です、進むと退くとの、聖淨二門の差はあつても、如實修行した曉、其功の成るや一であります。

吾淨土宗の出離の故實は、後退りする所にあるので、善導大師も、自身現是罪惡生死之凡夫と後退りし玉ひ、明照大師も、十惡の法然房、愚

後退りの三種類

佛のみ知り玉ふ

痴の法然房との給ひて後退りなし給ふ、況んや今時のお互は何と後退りしたらよいでせう、一枚起請に「假令一代の法をよく〳〵學すとも、一文不知の愚鈍の身になして」の御法語も、詰り後退りの趣である、此の後退りに、三種類の別がある樣におもはれます。一、先方から後退せよと敎ゆるから仕方なしに後退する。二、遠慮して後退りする。三には眞底から自覺自認して後へ退がる。此三者の內、淨土宗の敎ゆる所は第三にある、淨土宗は決して、無理無闇に後退りせよと、强るものではありません、自身の腹のドン底から、淺間しい凡夫ぢやと、骨身に泌み渡らずば、如來の慈光を仰ぐ事は出來ませぬ、善導源空二大師も此自覺よりして、大悲大願の有難さをお掬みなされたものであります。

廣懺悔にお互の罪の深さをば『上は諸の菩薩より、下は聲聞緣覺でさへ、お互の罪の深さを知ること能はず、唯、佛と佛とのみ、我罪の多少

己が罪を自覺せず

を知り給へり』の一文は、お互の罪の深さ重さを說破なされたので、お互の罪の量は、目蓮の神通、舍利弗の智、觀音勢至の補處の薩埵も、計り知り給ふこと出來ぬとして見れば、吾ながら罪惡深重に驚く程です。

乍併、か樣な罪ある身を、罪ありと認めずして日暮して居ります、なぜ、知らず悟らず認めず、平然と構へて居るのでせう、本願鈔に「火坑焰々として足下にあり」と迄、御勸化下されたが、それとも氣付かずに呑氣の出來るのは、詰り、我心の闇黑故に、心に積る塵垢が見ぬからであります。

くらやみに智者も糞をばぐにやとふみ

これは田舍の夜路なぞでは常にあることです、眼光紙背に徹する智者先生も、暗闇は仕方がない、糞をぐにやとお履みなさる、その如く、銘々の心が暗闇なら、如何なる不淨がありましても氣が注く道理はありま

一軒家の喩

せぬ、古の先德は、人の心の有難を一軒の家に譬へられた、御承知の通り、一軒の家では、明るい所と、闇い所がある、明るい所は、門口、玄關、勝手、佛間等である、此等は時々掃除もするし、明るい故に塵垢が眼立ちますから割合に奇麗にしてあります、所が暗い押入やら戸棚長持の後ろ抔は、煤やら塵、埃、鼠の糞で鼻持なりません、けれどもそれが暗い故に氣付かずにおる、よし氣付きましても、毎日眼立たぬ所ぢやから其儘にしております、別して百姓衆の秋頃には、毎日朝早くから、晩遲く迄で野田であるから、蒲團を疊む暇がない、で、夜になればトンネル式蒲團に寢込みます、而して寢た程樂なことはない、浮世の馬鹿は起て働くなどと喜んで居る、其内十日二十日と過ぎて、雨天にでもなりますと、寢床の掃除と、蒲團を疊み上げ、雨戸を明けて見ると、今迄の極樂の寢所、塵埃鼠糞、塵取に山程たまる、然るに明けずに、暗い其儘に

して捨て置けば、穢ないのに氣付かずに、極樂と思ふ。

今も其如く、吾等無始已來既造の罪、別して今生の身口意の三業になした惡業で、人眼にかゝる店先、勝手口、上り端は、明るい所故、稀には掃除もするが、少しでも、都合の惡い事、內證の事は、何も蚊も、心の押入暗棚に閉入れて、よい顏をしておる、ソシテ此心の秘密の押入は生れてより今日一度も明けられた事はない、室鳩巢は「人しれぬ心に耻ぢよ耻てこそ、ついに耻なき身ともなるらめ」と申しておりますが、此『人知れぬ心』『人に話せぬ心』それ等は皆心の暗藏に押し込んで、今日迄其儘にして暮して來た、若し此暗藏を、信心の窓を明けて、如來大悲の御光の照益に預かつたら、如何許の塵埃でせう、鼠糞でせう、これが信心獲得の姿である、淨土敎の罪惡觀、煩惱觀であります。

ソシテ此暗闇には、由來善事は行はれぬ、又よき物は棲家とせない、社會の罪惡は多くは夜中に犯かされてゐるではありませんか。

佛樣の暗きうしろや蚊のすみか

御佛は救世の大慈父に在して、金光燦爛光顏𩔖耀のお方であります、此佛樣でも後ろは暗くありますから、此の暗い所には、人の生血を吸ふ蚊の宿家となることを忘れてはならぬ、況んや佛ならぬ吾等の心の暗闇には、そも何物が宿家にして居るでせう、鬼か、蛇か、惡魔か『皆人の心の奧のかれ家は、鬼か大蛇のすまいなるらん』皆樣、自己を僞る勿れ欺く勿れ一度此に至れば、罪惡生死之凡夫、極重惡人、常沒常流轉、十惡五逆の垢の凡夫ではありますまいか。

思へば淺間敷身ならずや、かゝりければこそ六道の巷を徘徊たれ、此に極樂の敎主阿彌陀佛、平等一子の悲願に催されて、六八超世の願を樹て給ふ、吾等衆生の爲ならば、諸毒に此身を沈むとも、精進不退の大悲

心、げに勿体なし尊しと、吾を忘れて本願に取縋るを、深心と申すのです、これを善導大師は『二には彼の阿彌陀佛、四十八願をもて、衆生を攝取し給へば、疑なく慮なく、彼の願力に乘じて定めて往生せんと』と仰せられた。

其四

發心の因緣

凡そ發心の因緣は無量である、鼻から發心する人もあれば、眼から發心する人もあれば、耳から口から身から發心する人もあります、其中一番手近いのが、見聞の二緣である見と云ふは、眼で見て起る發心で聞と云ふは耳から起る發心であります、此娑婆は耳根利と云ふから、法門は聞き聽かねばならぬ、けれども又「見」と云ふ事も甚だ以て大切である、佛世尊の御姿を拜し、高僧の清風に接し、清淨の佛殿に參んず、此等は皆勝發心の增上緣であります、心眼得開の其後より顧れば、見聞覺知善惡二事、順逆二緣、皆一として發心の助緣たらざるはない、佛事門中一法も捨てずと云ふも、蓋し此等の事を指すのでせう、併し迷へる私共より申せば、逆緣の方が發心の善知識である、其逆緣の中「死」に過ぎたる力ある知識はあるまい。

昔し在學當時、選擇集講義の際、先生が不意に問はるゝのには『皆樣は親類、朋友、兩親、兄弟かの死相を視た事がありますか』……此時私は妙な事を尋ぬる先生ぢやと、何氣なく聞き流がしましたが、今にして是を考へまするのに、先生に深き御思召があつたのです、成程親しき人の哀れな死相を看る事が百卷の讀經や、百席の聞法よりも猶勝れたる發心の藥である、死相を視て何の感のない人なら、選擇集の百讀も、何の効果はない、鎭西上人の『念死念佛』のお言葉は萬代を照す西方者の燈

念死

明でありますし、此等から先生の問意を推し量かるに、卑近の問尋に、選擇の玄意を述べ、二祖の深意を提げての、有難いお尋と思ひます、小乘の不淨觀も、四念處觀も、大乘の深觀も、要は念死を出でませぬ。

此念死は、念佛修行の策勵ばかりでなく、安心獲得の主要なる素因です、もし親類縁者から、某も久々病氣の處、遂に藥石効なく、今日只今死にました、と死觸れがあれば、直に見舞に行く、それから其夜は通夜念佛、お互に覺にのある事です、始め日暮れから八九時頃迄は、見舞人も多く、枕邊に人は澤山ある、が、漸く夜更けて、十二時一時頃になりますれば、一人減り、二人減り、何時の間にか人が減つて、唯線香の烟のみ淋げに立上る、淺猿敷は人の心であります、けれども、如何に人が減つても、如何に眠たくても、いつも枕邊にて念佛申し下さる御方は、産み下された御兩親のみであります『世を救ふ三世の佛の心にも似たるは親の心なりけり』勿体なきは親様のお情けぢや、此の枕邊の人が漸々減り、夜は更けてシンと靜まつた時、舒に稱名の聲澄せながら、死相を眺めて、倩々ら觀念して見よ、今迄で息の在つた此人は、既に此世の人でない、生前の其如く、蒲團も着せ枕もかわせてあるが、息のなき者故に、頸のあたりがグニヤとして居る、眼は窪み口しまり、色褪せ臭氣立つ、前に供へた樒の花、立てだ一炷の線香、ア、何んと果敢ない事であらう、吾も追付け此身にならねばならぬか、抑も中央の來迎の佛達は、此の樣を何と御照覽あるであろう、御喜びか、御胸を痛めてか、想ふて此に至つたならば、生前惡しき事は出來ぬ筈ぢや。

更に思へ、今此人の肉体は此處に留るも、此人の神は今頃如何なる處にあるであろう、死出の山、三途の巷、踏み行かねばならぬ身上ならば今頃は如何程後悔して居るであらう。

『爾間無常の風一度ふきて、有爲の露長く消にぬれば、是を曠野に捨て是を遠き山に送る、屍は遂に苔の下にうづもれ、神は獨旅の空に迷ふ妻子眷屬は家にあれども伴はず、七珍滿寶は藏に充れども益もなし、唯身に從ふものは後悔の涙なり』

ア、こうと、もそつと早く知つたなら、今少し後生を願ふのであつた、善根功德を積むのであつたと、一足歩きて涙をこぼし、二足進んで後悔の、熱き涙をこぼ〳〵と、死出三途の獨旅、語るに友もあらはこそ、前世の業にひかされて、駛雨の如くに生れゆく、其時の苦しさ殘念さ、何れ位でせう。

深岸より墜つるがごとし

馬鳴菩薩の莊嚴論に、命盡終ノ時、見二大黑闇一、如レ墜二深岸一、獨逝二曠野一、無有二伴侶一、これは永觀律師の往生十因の序にも引用なされてある言葉で、誠に有難い語である、お互は一度死んで見て、死の狀態を實驗する譯に參らぬから、馬鳴菩薩の仰せを承て、死の模樣を豫知するのです、人死る時大黑闇を見る、眞黑の闇世界か忽然と現前する、闇は此の世でも氣味の良いものでない、況んや今は一期の盡る時、長く住馴れた世界をすて、妻に別れ、子に離れ、家も寶も其儘にして、自分獨り行かねばならぬ、其折の心のつらさ、淋しさ、恐ろしさ、自體愛境界愛の妄執に心の惹かれた折も折、忽然現れた炭團の樣な闇世界、何れ位恐ろしいであらう、餘所事に思ふてならぬ、吾身に引當て考へみよ、其時の心持は、筆や言葉で述べられぬから、菩薩はお喩で述べられた、菩薩でも述べられぬと見ゐます、强て譬へ見れば、如墜二深岸一、誠に恐れ入たお喩へで、お互が屋根から墜る時でも、膽の潰れる樣に思ふ、それが深岸から底も知れぬ谷底に墜込んだら、其落ち行く時の心地は如何でせう丁度うの樣に、頭下即生と三惑の巷に墜ち行くのです。

摑むこと

惚して落ち行くものは、墜てはならじと物を摑取るものです、學生は級より落じと學問を摑み、議員は選より落ちじと投票を摑み、官吏は位より落じと努力を摑み、樹より落つる者は枝を摑む、今吾等は三惑の巷に墜ると思へばこそ、他力の强緣を摑むのです、前席の後退りと云ふのも、全く此所であります、實は後退り所の優な話でない、如墜深岸と今墜つゝある身上です、アヤあぶなやと大悲本願の救手を摑むのを、二者深信と申すのです。

さればにや病者の中、死際に望んで、虛空を摑み、蒲團を摑み、枕をつかむ者がありますが、此等は單に病苦の爲ばかりでもありますまい、多分墜てはならじと摑むのでせう、あはれ斯樣の人にして、一念他力の妙願を信樂したらましかば、かゝることもあるまじを、身から出した錆とは云ふものゝ、曠劫のうらみではありませぬか。

佛願を摑むを第二信法と云ふ

西洋の或學者が、死際に『暗い暗い、明り明り』と切に呼ぶ故に、家人は此眞晝間に何事と想へども、病人の呼ぶ儘に、電氣をつけた、それでも猶暗い暗いと呼ぶ故に、果ては蠟燭、ランプ、ガス、と種々枕下に點しましたが、猶『蛉い明り明り』と呼びながら絕息しました、學問は善用すれば結構であるが、さもなければ邪思邪敎邪思惟と云ふて、因果を撥無し、世間道德のサタンとなる、今此學者死際に、闇い……明り……となぜ呼んだのであろう、多分人死る時大黑闇を見る、其闇世界が現前したのでせう、なんぼ闇いからとて、電燈ランプの光では、此暗黑ばかりは照されぬ、此闇こそは如來大悲の光明に照されて、始めて明るくなるのです、此故に大經に曰く、若在三塗　勤苦之處一　見二此光明一　皆得二休息一　無二復苦惱一。と

かくの如き大悲の本願なれば、無疑無慮乘彼願力と決定往生の思に住

するを他力の信とは申すものです、これを信法と云ふ、前の信機の法は「墜る」との自覺を云ひ、此の信法は佛願を「摑む」のを申すのです、『墜る』『摑む』の二つを、吾胸に體得したのを、深信と云ふのである。

骨を叩いて泣く

其五

閑林叩骨泣。靈鬼悔生前。或日釋迦如來が、御弟子の阿羅漢を連れて、托鉢に御出でなされ、其歸路に一つの森がある、其森中怪しき聲が聞へる故、立寄て御尋ねなされたら、一人の餓鬼が髑髏を叩きて泣て居る、何故泣かと問へば、私は前生人間に生れて、佛とも法とも知らず、慳貪邪見でその日を送り、その報に依て今は餓鬼道に落ち、饑饉饑渴の苦を受けております、その苦を受る毎に、憎くてならぬのは、聞くべき耳を持ながら、行くべき足のありながら、お寺へ參らず法も聽かず、ウカ〳〵と一生を暮して、未來永劫の宿を取損ねた、思へば思ふ程、前生の身體が憎く〳〵てならぬ故、髑髏を叩いて恨を晴すのです、と答にた。

誰しも、暮し來し過去を追懷して、後悔の念のないものはありますまい、夫等多くの後悔よりも、髑髏を叩いて生前を後悔する、これ程悲慘な後悔はない、もしお互が靈鬼の二の舞を演じたら、佛祖の御恩に對して何と申しませう。

蜻蛉の身の上

出る穴のあるに障子の蜻蛉かな

温かになると、彼の蜻蛉がフラ〳〵と家の内へ飛込んで、出口を失つて、彼處の障子に行當てはガチヤ〳〵、此障子に行當ては、ガチヤ〳〵と云して居る、こらトンボそれ今少しだろ、其次の目には、破れ穴があるぢやないかと、人間の方から見れば誠に堪へ難くてならぬけれと、蜻蛉の方では、其鼻先の出穴に氣附かずに、迷ふて居る、其内に遂に猫の

奴が見付けて、ポント一飛、鋭き爪にかけられて、一命を果たすのです

世の人は、彼の蜻蛉を見て馬鹿の奴だと笑ふけれども、今吾等の身上が同じく左様であります、何時の間か三界生死の火宅に迷み込み時には都合の良い、法門の穴に出合ひし事もあらうけれど、其良縁を取失せて、今に至る迄、業に業を累ね、罪に罪を造り、六の巷の障子に行當ては、所謂、濟むの濟ぬの、些細の事に握捉して、一厘二厘の間違より、額に癇筋立て、、解脱の道を求めざる輩の多いと云ふ事を考へて見れば、吾等も亦蜻暗の仲間ではありますまいか。

今、斯してお互が、本堂は佛前に參り、見佛聞法しているのは、蜻蛉が障子の穴に出合た様なものです、されば今生こそ娑婆の見をさめとして、生死の穴を出て、解脱の道に入らねばならぬ、それが前の靈鬼の様に髑髏叩いて後悔する様では、蜻蛉より愚劣の身なりと申さねばならぬ

宿を定むる必要

若し出要を求むる念佛者より見ますれば、蜻蛉のガチヤ〳〵も、吾等に出離を教ゆる善知識であります、行誠和上の歌に

法華經と鳴く小鳥さへあるものを
阿彌陀佛と云ふ人の寡さ

情けなきは五欲の身上です、小鳥の鶯さへ、法華經と泣くものを身靈長の人間として、南無阿彌陀佛と申す人の寡いのは、誠に殘念ではありませぬか、念佛申す者ない故、生死の障子に行當り、何時もガチヤ〳〵迷はにやならぬ、其中に無常の猫に摑まれて、後悔せねばなりませぬ、早く淨土の宿を求めて、安心立命せねばならぬ。

此の如來の願力を宿として安心し立命するのを深信と申すのです、ですから、安心決定の輩は、恰も旅に出た者の、宿の定まつた様なものかとおもいます、お互に寢るべき家がなかつたら如何でせう、皆様が斯し

て靜かに聽聞あるのも、皆夫々歸るべき家があるからです、もしも夕方に歸るべき家がなかつたら、何んぼ熱心な後世者でも、氣樂に聽聞は出來ますまい。

紀の貫之の娘

昔、紀貫之の娘が尼になつて、北野に庵を結んでおられた、其庭に見事に咲いた梅の樹、うれが天子樣の御目に留つて、彼梅奉れの勅命が降りました、綸言汗の如し、旱速根掘して奉りました、主上宮中にて是を御覽遊ばさると、梅の枝に奇麗な短册がつけてある、誰れの振舞かなと手に取り讀み玉へば、

鶯宿梅

勅ならはいともかしこし鶯の
宿はと問はゞ如何答へん

勅命なれば早速奉りますが、根掘した後で鶯が來て、私の宿の梅樹を如何したと尋ねたら、私は何と答へませう、天子樣に奉つた幸榮だ名譽だ、悅こべと云ふたとて、小鳥なれば聞解もすまい、唯一途に私を恨むであらう、其折私は何んと答へませう、の歌意である、御門も再讀あらせられ、誠に哀れの歌なり、鶯の宿を根掘したのは氣毒と、天恩が小鳥に及んで、遂に梅を北野の庵室へ御返し給ふたと云ふ事です、今日に傳へて美談として居ります、如何樣鶯でも晩に來て、宿るべき住家がなくては困るでせう、今吾等御互も亦爾りで、一期の壽盡き、イサ臨終の日の暮に、宿るべき住家がなかつたら如何でせう。

昔から『日昏れて家を思ひ、旅に暮れては宿を想ふ』と申します、朝早く百姓衆が車を牽き鍬を手にして野中で働いて居る內は、家の事もツイ忘れて居りますが、夕陽西に臼づき、鳥も塒に歸る頃になれば、我家を目差して歸る、又知らぬ他國の旅路の際も、氣にかゝるは第一宿です

『雨は降る日は昏れかゝる宿はなし、山路にかゝる旅如何にせん』此時

の心配さは如何でせう、た互は生れた其日より今日迄て、歸るべき家があるのですから、日昏になりましても、別に心配もありませぬが、廣き日本全國六千萬の同胞の内には、昏れゆく空を眺めつゝ、今夜の雨露を何處にて避んかと、人しれず涙にくるゝ者が幾萬人あるでせう、日暮れ日暮れに泣く人は、皆宿のなき人であります、別して同情にたゑぬのは現在歸るべき家を持ちながら、日暮日暮に泣く人である。

親なし子

叔達の孝

親のない子と濱邊の千鳥
日暮〳〵に袖ぬらす

三界に何か不幸と云ふたとて、兩親を失ふた孤兒程不幸なるはありまする、『元日や何はなくとも親二人』彼の叔達と申す人は、至極孝養なお方であります、唐の高祖が或日臣下を集めて宴會を設け、珍味佳肴を賜りました、其中に見事な葡萄があつた、臣下は頂戴賞味しましたが、叔達獨り頂戴したのみで手をつけない、帝御覽して叔達葡萄を好まぬかと御尋ねになると、達謹んで云ふ、恐れながら陛下某に一人の老母ありて近時熱病にて喉渴くこと甚し、晝夜心痛、今陛下の賜ふ葡萄にて母の口を沾さしめんと、高祖聞召して、其の孝心を愛で汝未だ母があるか吾は早く母に離れて今はなし、晨昏に思て忘れぬぞ、と仰せられた、高祖の言葉の通り、兩親の在る程幸福な事はない、此兩親を早く失つた孤兒は氣の毒の上にも氣の毒である、其の孤兒とても、晝の間は外の小供と一緒に、前後も知らず遊んで居りますが、追々日暮に近けば、一人歸り二人歸り、皆夫々歸つて仕舞ふ、もし歸を忘れて居れば、お母さんが心配して呼びに來て下されます、所が、何んば日暮になつたとて、呼に來て下さるお母さんはなし、家に皈つて抱いて下さる父はなし、皆な仲間の歸つた其後で、ボンヤリ佇んだ孤兒は如何でせう、なぜ私はお母が連れ

に來ないであらう、隣の坊の樣に私はお母さんがないのであらう、と日暮日暮に袖濡す、孤兒は實に氣の毒なものであります。

今、人間と云ふ者も、五十年の晝の内は、損得利害に心を取られ、東に驅り西に走りて、飛んだり跳ねたりして居ますが、頓て臨終の日暮になりて、汝佛名を稱するが故に、吾來て汝を迎ふと、迎に來て下さるお母さんはなし、行きて宿るべき家はなし、如何したならよいものかと、後悔交々起り泣かねばなりませぬ、由是、平素安心決定と、淨土の宿を求めて、來迎の母上を定めておかねばなりません。

淨土の宿を求めよ

其六

理仙行者の別時念佛

三河國は昔から佛敎の隆盛な處で、俗に佛敎國と申しております、特に我淨土宗の盛な所と全國の信者から尊敬を受けて居ります、ツイ近頃にも、理仙行者と申す大德があらせられた、時に深山の靜な境に入つて別時の如法念佛を開白さるゝのが例であつた、元祖樣も時々別時の念佛を申せと仰せられて、實際念佛の有難い事は、別時念佛を勤めてこそ始めてそれと合點が參るので、淨土宗の信者は、是非此の別時を行ぜねばなりませぬ、爾るに近來は、口で話し、耳で聞くだけで、別時念佛がすたれて居る樣ですが、これは誠に殘念な事です、淨土宗の生命は、別時と日課にあります、こは改めて申す事にします、さて理仙行者、時々の別時も尙不足に思はれけん、更に一千日の別時如法念佛を開白せられた、これがお互なら如何でせう、僅々二三十分の朝夕の勤行も、倦み疲れて欠の連發、殿尻をモサ〳〵、線香を丸で敵のようにねめ付けますが是れが十日や二十日の事でない、一千日の如法念佛とは、誠に以て直人ではありません、往昔、二祖鎭西上人が高良山の麓で、一千日の別時念

佛を修行あらせましたが、今は其の芳躅をお慕ひなされたのでせう、村人尊ぶこと眞佛の如し、兎角する間に三年の別時も目出度終りましたから、これ偏に佛天の加護と其の御禮の爲に、更に百日の別時を追加された、其の勇猛の樣、人間業とは思へませぬ、始め眞佛の如く尊敬した村人は、敬が通り過ぎて、却て惡口となつた、それは行者樣の行狀は人間業とは思はれぬ、恐らく狐狸のお化かも計られぬ、さもなくば彼の如き修行の出來るものではない、と惡口を云ひ出した、人間は善につけ惡につけ、何んとか癖つけて惡口したがる、實に淺間數い動物です。

小供は正直だ、それを聞いた小供良い事聞た、明日は山に登て行者に尋ね樣と、翌日行者の處へ參て『行者お前はソウ見ても實の人間ではなうて、狐か狸のお化だろうだ、よい加減に本性出しては如何だ、偉い村の評判だよ』これを聞いた行者、ナニ已れを狐狸のお化と云ふているが、私一人だけ狐狸のお化でないり、予を以て之を見れば、一切衆生老若男女、皆悉く貪瞋煩惱の狐に化され、瞋恚愚痴の狸に化かされた迷子ちや、それを私一人だけ化物の樣に心得て、自分達のお化に氣が付かぬのか、噫、哀れな奴ちや、と答にられたと云ふ、名高い話があります。

げにや、考へて見れば其通で、お互も皆化物です、夫を氣違とも化物とも氣付かずに、營々として日夜を暮して居るのです、阿彌陀佛の深重の誓願は、此の吾等を不憫と御思召して、長載永劫の苦修練行あらせられ、遂に不取正覺の誓を成就し玉て、南無阿彌陀佛の六字を施し給ふ、お互は此名號の功德に依て、三毒五欲の狐狸を追出して、迷の境界を離るゝのです、ナント有難い事でないか。

不簡擇の大慈悲

此の如來の大慈悲を不簡擇の大慈悲と申し奉るのです、不簡擇とは、彼れは助けても、此れは救はぬと區別を立てぬ、貴賤道俗、智愚賢不肖

種を蒔け

老若男女、誰れ彼れなしに、助けにやおかぬの大誓願を申すのです、此故に、第十八願に廣く十方衆生と、誓ひ玉ふてあります、十方の言光く一切を攝す、お互は元より云ふに甲斐なき者でありますが、十方衆生の一人です、偏に願力を頼み奉れば、往生の素懷掌にあり、豈愉快ではありませんか、此の不簡擇の大悲をば、

植にて見よ花のそだゝぬ里はなし
心からこそ身は卑しけれ

成程、土地に依て、肥にた痩せた、地味の良い悪いの區別はありますが、種さへ蒔けば、必ず花は咲くものです、勿論、土地の善悪に依て、咲た花の大小、好悪、醜美はありませうも、種さへ蒔て育てゝ見ますれば、何れの里にも育たぬ所はない、皆分に應じて花が咲くのです、如何に好い地所でも、種も蒔かず育てもせないならば、萬劫花の咲く氣間はありません、今も其通り、お互の心の田地には、智惠學問、持戒道德の肥にた地味の人や、曾一無善と二六時中煩惱に刈立らるゝ、礫や瓦やの荒田地の心の區別はあるけれど、南無阿彌陀佛の六字の種を植て見よ、必ず往生極樂の花が咲くのです「植にて見よ花の育たぬ里はなし」是れが不簡擇の大悲、萬機普益の有難い所です、皆樣、南無阿彌陀佛の念佛の種が吾が心に蒔けましたか、此種蒔かずにおいて往生淨土の花咲かせ樣とは、そりや無理ぢや、然るにこかく此種をまかぬから「心からこそ身は卑しけれ」と古人も嘆息せられた、不足は人に云にぬ、自分で悪いのです。

念佛の種を心に蒔け

本日參詣の人々で、念佛の種の心に蒔付けてない人はよもやあるまい皆蒔いである人ばかりぢや、而し種を蒔いた已上は、此に大切な事がある、それは其の種を、掘られぬ樣、腐らさぬように、注意をせねばなら

異學異見の鳥

ズルけ懈けの鳥

ぬ。

權兵衞が種蒔きや、鳥が掘じくる
三度に一度は生にずはなるまい

權兵衞が種まきや鳥が掘じくる、三才の小供も承知の言葉ですが、浮心に聞流しては相ならぬ、今、吾等が心田に、漸く蒔きつけた南無阿彌陀佛の信心の種も、浮か〳〵すれば、頭の黑い鳥に掘じられる、其の鳥と云ふのは、善導大師示しての玉はく、異學異見、別解別行の鳥である若し此鳥に出遇ふたならば、信心の種堀じられぬ樣に注意をせねばならぬ。

まだ此外に信心の種を掘る鳥がある、それは、ズルけ懈けの澁太い鳥である。

懈怠の者は此法を信じ難し

人のけもの

無量壽經のお詞の通り、よし一度は信心の種を蒔かれても、ズルケ懈けのために、殘念なことには、掘られて仕舞ふ、豈にたゝ、往生淨土の事だけぢやない、世間普通の事柄でも、ズルケて可い事は一つもない。

人の中にも毛物がござる
ずるけものやらなまげもの

一体、毛の附いたものに碌なものはない、呆け、ふぬけ、間ぬけ、ずるけ、懈け、むねけ、食いけ、色ろけ、ぼけ、これ等はけが下にあるのぢやが、上についたも矢張り惡い、けちん坊、けだらけ、けがらわしいけしからぬ、なご餘談はさておき。

此念佛の懈怠は往生の障りである、此の鳥に切角の寶を掘られてはならぬ。

其の種を掘じられぬ爲には、種を深く植に込むより外に仕方がない、

其の深く植ゑ込むのを、深心と申すのです。

『其信堅き事金剛の如く、一切の異學異見別解別行の輩に、動亂破壞せられす』と善導大師の御示も、全く此の處であります。

さて此で、深心の種は蒔けたにせよ、蒔たゞけでは花は咲かぬ、是れを能く心得ておかねばならぬ、蒔ただけで實が取れるなら、百姓程呑氣な商賣はない、そうは參らぬ、蒔た上は雨露の霑や、肥料をやることを忘れてはならぬ、これ無ては種は枯れて仕舞ふ、其深心の霑や肥料とは平素の見佛、聞法ぢや、朝夕の佛壇の勤行や、緣に從つてのお寺の說教が缺ける樣では、肥が足らぬ水が足らぬ、信心の種も必ず自然〳〵に枯れて來る、是では何の所詮がない、さればお互は此道理を克く能く胸に疊込んで、間違いなく往生淨土の花を咲かせにやなりません。

其七

深心の結論

二者深信の話は先づ濟ました、此で結論として注意迄に、モ一二席お話を致します、それは世の中には、深心、安心と姦しく云ふから、此大切な安心を獲得したら、余程變つた事があるものと心得て居る者がある今席にも左樣な人が澤山ある樣にも見受けらるゝ、參る度參る度に信心安心と姦しく御話があるから、何でも信心獲得すれば、盲が急に眼が明た樣に、黑雲がカラリと晴れた青天の樣に、吾胸がカラりと晴れて、一點の疑念惡念が起きず、丁度、大石良雄が本望を達した時の辭世に「あら樂し思はるゝ身は棄つる、浮世の月にかゝる雲なし」歌ふた如くに吾が胸の雲が晴れる樣に豫想をして居る、所が、何時迄過ぎても、心のモシヤクシヤは取れず、是れでは未だ信心がないのかと、却て自の安心

安心の心配

表具師の有金憂金

を疑出して、切角今まで在つた安心を、自分で根掘して枯して仕舞ふお人がある、これは篤と合點せねばならぬ。

大經に、有田憂田、有宅憂宅とある、田あれば有るに付て憂へ、宅有れば有るにつけて憂ふ、無ければ無に付て憂ふ、是れが世相の常態である、有無共に憂は絶ませぬ、今安心も其通り、無ければ是は大變ですがそれかとて有れば又有る樣な心配が從き廻るのです、是れを『安心の心配』とでも申しませう。

昔、京都に名高い表具屋があつて、天性磊落、余程變つた男、高家、大屋、富豪に出入して、朝から晩まで仕事に逐れて、大層商業繁昌しておりました、所が此表具屋、他所から歸るが否や、直ぐ奥座敷の一枚の疊を擡げて『居るか』『ソン穩かにして居るな』『ヨシ〳〵其通り穩かにして居れよ』と打眺めて嘉ふのが例であつた、それが毎日必ず歸れば屹度疊擡げでニコ〳〵と挨拶するから、弟子が怪み出して、留守中に疊を揚げて見ると、黄判五六枚ピカ〳〵して居る、成程師匠が心配して見るのも尤ぢや、若し是を隱したら、如何程師匠が驚くであらう、其時の師匠の顔が見たいと、よせばよいのに、留守中に他所へ隱した、夫れとは夢にも知らずに、師匠帰るや、例の通り疊を揚げ「居るかオヤ、今日は遊に參つたな、それもよからう」別に力も落さず平氣で飯を喫べ出した、待ち設けた弟子は落膽、是れは己が悪かつたと、隱した黄判をお膳の前に並べたら、オー又歸つたか、是には困るなー、實は世人がお金程結構なものはないと云ふから、うんなに好い物なら貯蓄せんと、工風に工風して、やつと積んだ黄判五六枚、さて貯て見れば結構所が、得意先へ仕事に出て居ても、黄判の事が氣にかゝり、若しも盗難に遇ひはしまいか紛失は致しはせまいかと、心を煩す、斯樣な事なら貯へるのでなかつた

獲信后の態度

と思へど、まさか捨てる程の思切も出來ず、毎日困て居た所、今日も今日とて、皈て見れば姿が見ねぬ、やれ嬉しやコレデ元の氣樂に立還られると、内心は悅んで居た所へ、折惡しく歸つたのか、と慨嘆されたと云ふ事です。

金の無い者から云へば、有たら斯樣な心配はよもあるまいと想ふが、さて有つて見れば、又それには夫の心配が付き廻るのです、未だ安心を得ない人から見れは、安心決定したら、よもや斯樣な惡念異念は起るまいと思ふて居れど、さて安心決定したからと云ふて、妄念妄想がガラリと晴れるものでない。

これでは信心を得るも、得ないも、別に變りがないかと云ふに、左ふでない『欣慕己前の吾には似るべくもあらず』と仰せられてあるから、信心決定の曉は大に變るのでありますす、如何樣に變るのかと申すに、私

熊谷蓮生信後の變化

は熊谷蓮生の事が、此場合好例と思ふ、熊谷蓮生が黑谷上人の御教示を受け、單信無二の行者となつて、古鄕へ還る、東海道の道中に、威勢のよい大名の行列に遇ふたから、路次によけて居る時に、馬上の大將が法師の頭上に痰唾を吐きつけた、無禮なり大將と仰ぎ見れば、昔の戰友の宇都宮賴綱であつた、ウヌレ賴綱無禮なり、切り捨てんと致しましたが何思ひけん念佛の聲と共に怒を抑へ、頭を下げて大名の行列を見送つた是れが昔の熊谷なら如何でせう、天下の鬼武者も、今は剃髮染衣の佛弟子なり、何んと變り果てた熊谷ではないか。

妄念は退治できぬ

山は山松は昔にかはらねど
變り果てたる我心かな

か樣に變ばらねば信心決定とは申し惡いのでありますす、變ればとて、根が凡夫でありますれば、貪瞋煩惱、妄念異念が全く退治が出來たかと

申すに、決して左様でない、同じ念佛宗でも、或一派の人々は、信心獲得の一念、正定聚不退轉、次如彌勒と申しますが、是れは非常な間違でお互日常の心の狀態に反するので、邪義外道の考に陷込で居るのです。

西行法師の金猫

昔、西行法師が、鎌倉の頼朝將軍の歸依を受けて、鎌倉に請待せられた、名高い西行法師ですから、さぞ有難い説法があつたでせう、頼朝も殊の外感じて、其の御禮に床の間にある金の猫を布施した、其を受取て門前迄來ると、小供が視て居て、金の猫を欲しがる故、小供にうれを與へて、後見もせずに立去られたと申すことです、是をお互に比較したら如何程に較段があるでせう、老婆參詣して、財布の中を一心に見詰て居るからハア不思議と注意して見れば、一錢では勿体ない、五厘錢は何處に、一厘文久は何所と鵜の目で捜して居る、漸くにして見付た文久錢、夫を勿體らしく奉戴きて、ヒヨイと抛げる時の手付は、如何にも名殘が欲しそうに見受けらるゝ、か様なお互を西行法師に比較したら、何れ程の格段があるでせう、其高徳の西行法師も

世を捨てゝ身はなきものと思へども
雪の降る日は寒くこそあれ

と本根を明して居ります、西行の様に證悟した人でも、雪の降る日は寒く、夏中は暑い、今も其如く、安心決定したからとて、矢張凡夫の悲しさに、腹も立つ、怒れもする、元の凡夫の地體は變らぬのです。

それでは、其安心獲得已後の心配とは、全體如何様な心配が付て廻るかと申すに。

彌陀頼む昔の人も吾が如く
思ひすごしの絶にずもあるかな

斯様な心配は必ずあるものです、お互が如來の寶前に跪きて念佛する

凡夫の地金其儘

時、念佛する位ちやから、安心ないことは云はれまい、所が吾が胸の内は妄念妄想、悪念邪念が腹一面に充ちて居る、か様に見下げた垢凡夫、此の分では迚も今度の往生は如何であらう、よもや昔の往生人は、此の如く心根の淺間敷くはあるまいと、我身の腑甲斐なさに泣き倒れる事がある、此時決して量見違いをしてはならぬ、昔の往生人も、矢張り吾と同じ凡夫なれば、吾が如きの心配があつたのです、ですから、お互は心の晴れぬは凡夫の地金、持て生れた悪性と、其儘に捨て置て、唯夫等にかまはずに、唯一向に念佛するが、淨土教の極談、往生の至訣である、稱へた聲に付て決定往生と確心するのです、或人德本行者に、徒らに多念を申すは無益の由語りけるを聞きて。

南無阿彌陀阿彌陀佛々云へばよい

心なうして申せるものか

とお答になつた、此が淨土の安心です信心です「心なうして申せるものか」の一句千鈞の重があります。

其八

決答疑問鈔云　問何故三心具足上　現世貪瞋強盛起　後世心行尙弱覺

答　貪瞋無始串習法故強　願生今生始勵心也故弱　他力本願當此時施

利益　二河譬釋能々可見合也

前席に安心具足の者と雖も、根が凡夫の悲しさに、今迄の胸の曇がカラリと晴れて、一點の雲のない様には、なれるものでないと云ふ事を申しました、ですから安心獲得後も心配は絶えぬものである、心が絶えぬからとて、安心未具かと疑念を起してはなりません、是れは大略前席に述べました、今度は

大事にする程心配あり

其上、總て物事は大事にすればする程心配の付添ふものなる事を述べたいのです、例へば本日參詣のお方の中で、寺參は法要後混雜して、よく下駄を間違へたり、取られたり、紛失したりするから、始めから用心して、磨り切れた草履を履きて來たお方は、取れ樣が紛失し樣が、一向頓着ないから、一寸もソンナ事には心配なしに聽聞が出來ます、（此にて道德上、下足の脫ぎ方、及履物に間違のなき樣、次でなから細說するも又得り、參詣人の上品下品は、脫ぎ捨てた下駄のならべ方にて大略の推定が出來ます云云）

然るに是れが花嫁さん、若い娘さん抔が晴着を飾つて、御參りになると、下駄迄でが上等ですから、サア心配です、聽聞中でもお說敎は耳へは入らぬ、ヤレ小供が戯りはしまいか、鼻尾を汚しはしまいか、若しや間違へられて、惡いのと取違へられはしまいか、說敎中に檢査に行くのも、人の手前氣兼をする、考へ込んだ揚句、小便が堪らぬ樣な風付して態々下駄を檢査に行く、一席終れば早速に、足が痛いと椽へ出て、コツソリ下駄を見に行き、ヤレ安心と胸なぜ下す、是では佛樣にお參りに來たのでない、下駄にお參りに來たのぢや、ソンナニ大事な履物なら、藏に鍵かけて秘藏しておけばよいのに、チヤント始末つて置ても、鼻尾に虫が付て食いはすまいか、色が褪せはすまいか、それでは切角求めた甲斐がないと心配する。

或處へ說敎に行きました時、二十位の嫁さんが綺麗に髮を結立て參詣して居た、切りに手を下げては髮の後を撫でて居る、それが高座から視れば非常に眼立つ、その後には背後を顧みては髮を撫て居るから、ハテ合點行かずと、嫁の背後を見ますれば、六十程の婆さんが居眠出しゴクリ〳〵と胡麻鹽頭を振り出して額で前の嫁の髮の後を打ちつける、未だ浦若き嫁さん、小言も云かねて背ろ向いては髮を撫ぜ、撫ぜては背後を向いて居た、誠に氣毒な事ぢや、大事の大事な髮なれば氣にかゝるも決

して無理はない、而し是れでは、説教を聽問に來たのではない、髮の毛を撫に來たのぢや。

往生淨土は最も大事なり

此等も畢竟ずる所は、大事にするからして氣に罹るので、大切でなければ別に氣に留めない、今お互の身に取つて、尤も大切な事は何か、人に依て種々あらうかなれど、今は夫等を申すのでない、吾等三界の迷兒六道輪廻の垢凡夫、此儘にして捨て置けば、千劫萬劫、恒沙劫、浮つ沈みつ流れ行く、見下げ果たる者なれば「往生淨土」の事抔は思ひも寄らぬ身上です、それが前世如何なる宿緣か、佛願難思の大法に遇ひ、六字名號の功德に依りて、諸上善人俱會一所の往生淨土の素懷を遂げんこと、これ程の大事が又ご世にありませうか、是れ程の大事な事ですから、自然心配が付廻るのです、是程の大事を大事と思はず、夢の現で暮して居る人には、決して往生淨土の心配はないのです、此の心配のある人達は皆安心決定の行者です、祖師上人の勅傳四十八卷は、悉く西方の指南、行者の目足なれども、要を取て之を言へば『此度如何して、確に生死を離れ候べきか』の問題に惱み、而して是に活ける解決を與へた、出離傳であります、往生傳であります。

元祖樣得生の御心配

斯程の一大事、往生淨土の事なれば、具三心者必生彼國、安心具足のお互が往生に付ては、露更疑はなけれども、要中之要たる往生極樂の事でありますから、安心決定の其上にも、尙心配氣遣いは付廻るのです是れを『信ずるが故に疑あり』『信ずるが故に苦勞あり』と仰せられてあります、三祖上人は、是れを『起行の疑』と指南あらせられた。

此大事にするが故に心配、氣遣ありと云ふとは、末世末機のお互にのみ局つた事でなうて、元祖樣にも矢張あらせられたのです、大師或時『あはれ此度往生をしあうせばや』と宣ひし時、弟子尋ねて申さく、上人

だに往生を不定げに御思召さば、吾等如何でか往生し得んと、其時大師の御答に、正しく蓮臺に手をかくる迄は『如何でか此思なかるべき』正しく聖衆現前し玉ひて、蓮臺に手をかくる迄は、大師とても此の心配があるのでず、是を以て惠心先德は往生の得不を占ひ、道綽禪師は善導大師に往生の得不を尋ね玉ふも、皆此譯けから來るのです、況んやお互の樣な身には、絶にず此の氣遣がある筈であります、若し此心配の無い時なら、却て往生淨土の一大事を、打忘れた時であります。

安心は必定の二字を字眼とす

既に經文に、具三心者必生彼國とて、間違なく往生するのです、淨土の安心に於ては、必定の二字が字眼で、必生彼國、必得往生、決定往生或は決定して必定して往生が遂げらるのです、さすれば具三心者は、既に彼國の菩薩聖衆の仲間入の身であるから、須らく佛心を以て佛行を修せねばならぬ、爾るに我内心を顧るに、佛心佛行所か、日々夜々所作罪念々歩々所起罪、三毒五欲の煩惱に扇り立てられて、三途の下構へのみであります、か樣な心ばにては、安心未具にてもやあらん、願王の悲手吾等を漏らし玉ふにやと、一二の足踏んではなりませぬ、是を三祖上人決答疑問鈔に、お互の心事を看徹して

問『何が故に、三心具足の上に現世の貪瞋は强盛に起り、後世の心と行は尙弱く覺ゆるや』

皆樣の胸に手を當てゝ、靜に考へて御覽、此通りで、鏡に寫すより猶明かです、僞りは申されぬ。

答『貪瞋は無始より串習せし法なり故に强し、願生は今生に始て勵すの心也故に弱し、他力の本願此の時に當て利益を施す、二河の譬釋、能く〳〵見合すべし』

どうです、貪瞋は無始已來串習の惡癖ちやから故に强い、願生は今生

に始めて起した願心です、それも小供の時から、自然にあつた願心ならば兎も角も、ツイ此の五六年に、ヤツト起した願心ぢや、物に譬へて申すなら、線香の烟のそれよりも、猶細そ〳〵した願心ぢや、故に弱いのは當り前ぢや、斯樣な末代五濁の下機を、目あてに立てし他力の本願なれば、弱い願心の其中から、南無阿彌陀佛と稱へさへしたら、吾は助けにや置かぬの誓願なれば、必至と本願に取縋るを、決定往生の行者と云ひ、金剛不壞の信心と申す也。

是より進んで、二河白道の御話に移るのですがそれは今度の御緣にゆづります。

三者回向發願心

淨土敎の理想

第六　三者回向發願心

其一

今席より第三回向發願心に移ります。

此回向發願心は淨土敎の理想を指すので、至誠心も、深心も、詮ずる所は、極樂往生の爲であります、此往生淨土の理想の爲に、至誠心も深心も必川になつて來るのです、故にこの願生彼國の理想の下に念佛申すのです、若し此理想を外づれた念佛、祈念、祈禱、息災延命、家内安全の念佛なら、餘事回願と云ふて、回向發願心の行者と申すことは出來ませぬ。

理想の大小高下は、同時に其人の大小高下を意味するのです、お互の本望は、塵芥の細事になくて、成佛、極樂往生にあります、此の宏遠幽

妙な理想を抱いて、南無阿彌陀佛と稱へるのです。

さて回向發願心とは。

淨影大師曰、直爾趣求說之爲願、挾善趣求說爲回向、と「大乘義章」に ありますから、回向と發願とは、細く云へは別物なれども、淨土宗に於 ては回向と發願と別釋することは致しません、回向の中に願を込めて話 すのです。

『昔し今我人の功德といふ程の物をば、皆悉く捧て往生せんと回向する 也』淨土略要抄

『唯中念佛を極樂に回向して、眞實に往生せんと願ふ意を云也』本願抄

同じ佛前に向ひ念佛していましても、それが往生極樂の念佛でなうて、 家内安全、息災延命、富貴繁昌、病氣平癒の現世祈禱の念佛なら、中す 念佛を極樂に回向したのでないから二祖鎭西國師は

邪因邪業の輪廻業とお誡めになりました、彼一枚起請文に、唯往生極 樂の爲には南無阿彌陀佛と申して云々のお勸化も全く此旨であります。

或語錄の中に、丹波の信者が、態々河内國に身代本尊ありと聞いて、 禮拜の爲めに參り其村の附近で田地を耕す人に、此村に名高い評判の身 代本尊を問いましたら、其れは我家なりと、百姓が同道して連歸つた、 而して之を拜するに、血流れの痕、切られた瘡或は燒かれた燒傷もなし 別段普通の如來樣と變りはない、依て其由を質せば、主人曰く、御身代 の本尊とは我等が爲也、身代に立玉ふ五劫思惟成就の佛なり、君の尋ね 玉ふは、現世一時の身代の本尊か、ソレナラ當村の何兵衛の如來樣なり されぞそれは唯一度の事也、今拜み奉る御佛は、盡未來際で一度や二度 の身代の本尊でありません』と、丹波の信者大に感心して歸つたと申す ことです、皆樣なんと有難い話でありませんか、世間には身代り地藏、

身代り本尊

身代り觀音と聽て、飛立つ樣に有難く感じて我屋の佛檀の阿彌陀如來が眞實の身代の本尊なることを忘却して居る、靜に考へ見ますれば、罪惡生死の凡夫、煩惱具足のお互、日々夜々作す所は、皆是れ三途の苦因、か樣の見下げ果てた垢障の迷兒、それを勿體なくも阿彌陀如來、助け救はんと云ふ願を起して、五劫の思惟を成就して、正覺の法王となり玉ふ是こそ眞の身代の本尊でありませんか、只私一人の身代のみでない、吾等の祖先も、可愛い妻も、いとしき子も、一家族は申すに及ばず、遠くは正覺十劫の其日より、末は末法萬年の其時迄での、一切衆生の身代りにてあらせらる、此有難き本尊を打忘れて、朝夕の勤行を怠り、香華燈明の供養を懈る、眞に殘念なことではありませぬか、是乍併、如來樣が眞實の身代り本尊なることを信仰しないからであります。

斯樣な本尊のことを打忘れて、息災延命、家内安全、病氣平癒と横道へ横飛して仕舞ふ、それも横飛して利益があれば兎も角も、愈々深底へ落込むのです。

熊野權現の託宣

さばかりに願ふ言の葉よしさらば
叶へたりとて幾程の身ぞ

紀州熊野權現の御宣託に、日本一國の諸國、東は北海道西は九州長崎より、態々海山越にて參詣に來るから、何か一大事の賴み事でも在つて參るのかと見てあれば、來る人來る人、參る人參る人、皆打揃ふて家内安全、商賣繁昌と、ホンニ眼先のこと浮世の事、娑婆の事だけを願ふて未來後生の一大事、生死解脱の出來る樣に御導き、御守り下されと、願はにやならぬことを願ふ者がないと御慨きあらせられてある。誠や人間一生僅かに五十年、七十年は古來稀也、假令願の如く叶へたりとするも今幾許の餘命とするか、よしや百年の長壽を保つも、觀じ來たれば一睡

の夢のみ、此間眼を怒らして不急の事を諍ふ、權現の悲歎も眞に理りであります、未だそれのみでない、參詣人が皆な權現樣が餘りに山奥に住み過る、今少し參り良い、平地にあれば頗る便利だに、それに斯樣に山奥では、草履は切れる足は疲れる、神樣も氣が利かぬ抔と不平駄羅〳〵に參る、これも權現の神意が掬取れぬからと御慨きあらせらるゝ。

熊野路を物うき旅と思ふなよ
死出の山路を思ひしらせん

斯の如き深重の神意を計らずして、參る人來る人が皆揃ふて、家内安全息災延命と祈禱して、一大事後生の事を忘れて居る、それでは切角海山越して參詣した所詮がないと、神樣の御慨です、サア此道理を克く聞解て、假令一聲二聲の念佛も「皆悉く捧げて往生せん」と餘事回願は振捨て、本當の往生極樂の爲に、申さにやなりませぬ。

慈惠僧正の發心

稻の喩

斯く云へば、念佛者は現世のことは如何になつても、惡病に罹からうが、家が潰れ樣が野たれ死しやうが、かまはぬかと云ふに、決して左うでない、昔し惠心先德の御師匠、慈惠大僧正が未だ修業眞最中の時、一日思ふようは、娑婆一生はトマれかくまれ、後世の一大事だけは眞實に出離解脫せんものと、山王權現に參籠して祈願せらる、其夢告に曰く、汝の願望に由て、行末吾山の座首に致さん、夢覺めて後思ふ、吾れ現世の果報を願はず、それに座首にせんとは何事ぞや、と不本意ながら日を送る内に、其後閲藏のおり、經中稻のお喩があつた、それは、米さへ收穫れば、結構な藁は不求自得と、大僧正三禮して、尊哉此言、吾發心の時、後世の出離を願ふて、却て座首の夢告に接す、今經意に準じて之を案ずるに、後世出離の米既に取れり、故に求めざる座首の藁が來るなるべしと、非常に勸喜なされたと申すことです、今も其通り、往生程の

不求自得の益

一大事の米が取れる人ならば、娑婆五十年の藁は求めずして自然と得らる、況んや心光護念の照益に預者、横病横死横難は免れて、身心柔輭の現生護念に預るのです、此外何の不足があつて、現世のことを祈らねばならぬのですか。

私の知人に、長谷川某と云ふ信者があります、日露交戰の時、長男も次男も共に出征した、村内でも一百二十人程出陣しました、其の兩親達や女房小供や兄弟達、皆な無事であれかしと氏神へ跳參をした、それが日に朝と晩の二度宛であります、苦しい時の神頼と外からは笑ひもするかもしれぬが、それは人情を知らぬものぢや、笑ふ所ぢやない命がけ眞劍の跳參り神詣であります、皆なのものが神前に柏手をうち、ぬかづきながら胸の内。

『氏神さま何卒そ、何卒そ、私の息子の豆達者のやうに』こゝ迄は不難だが、それからが問題『なんなら隣の息子は死んでも世話はない、村の者は腕一本や足位きられてもダンない、だが神さん、己れとこの息子、慥り頼みます可いか神さん、私は一生懸命だぜ、どうか内の息子だけは、なあに隣のことはどうでもよい』

これなら大々の不都合だ不都合の頼方に違ひないが人情にほだされて大抵の人は、まあ、これに似たやうな願であります。

長谷川某も恩愛の絆に引かされて、それに似たやうな趣を毎朝禱つて居たが、お說教の歸途不圖思樣、我誤てり、今迄の如く我子無事と祈るは親心として決して無理からねど、こは國を忘れて私を計る私念也、なぜて神意に契はんと、翌日よりは早く戰の終りて兩國民をして安堵せしめ玉へ、と懇に祈願して、一年程送りました、爾るに戰雲收まつて、長男は無事、而かも武勳輝く金鵄を得て歸り、次男もピン〳〵者でかへつ

た、無事に歸へれと祈つた親達の子は多く戰歿しました、是れ全く不求自得の利益なり回向發願の御開運と、當今では親子眷屬擧つて單信無二の大行者になつて居ます。

此等が眼前の餘事廻願に走らず、一向西方の專心の行者の好例であります。

其二

唯申念佛を極樂に回向して眞實に往生せんと願ふ意を云也、又云、昔し今我人の功德といふ程の物をば皆悉く捧げて往生せんと回向するなり。

讀んで字の如く誠に有難い仰です、今、回向心を容易く心得んが爲に譬へて申しませう、譬へなればとて浮心に聞流してはなりませぬ、世の中に譬がなくば半ば黑闇ぢや、熱帶地方の雪を知らぬ小供がお父さん雪は如何なものですか　父『綿が一面に降るが如し』　子『そんなら蒲團にしたら温いでせう』父『それでは白砂糖の樣なものぢや』子『甜めたら甘いでせう』父『白粉の如し』　子『團粉にしたら甘いでせう』遂に父が說明に究したと云ふ話がある、それでも尙譬喩を假らば幾分かでも雪の說明が出來る、若し喩へなかつたら殆んど手のつけ樣がない、是に由て、法華經に譬喩品あり、善導大師に二河白道のお喩へあり、譬喩なればとて輕く思ふては相成らぬぞや。

譬へば溝の如し

回向發願心は、譬へば溝の如し。天から雨が降れば其雨は木の雫も雨垂も、溝を尋ねて溝から溝へ、河から河へ、遂に大海に流れ込みます、今回向心は恰も其の溝の樣なものです、お互が稱へた念佛、積んだ萬善萬行の善根は、回向心の溝から溝へ流れ込んで、遂に有難や極樂界へ會

譬へば締め括りの如し

入をする、若しも其溝が家内安全息災延命の方角に穿ちてあれば、皆娑婆執着、現世祈禱と流込んで、果ては輪廻の邪因邪業となるのです、謹むべきは願心の溝ならずや。

回向心は喩へば締括りの如し。

ぶら〳〵こしてる樣でも瓢簞は胸のあたりに締括りあり

人間も其通り、自墮落でも、横着でも何處かに締括りがあれば、尙取り所があるけれども、締括りがない人には、丸でお話にならぬ瓢簞よりも劣つた人です、今も其如く、申した念佛は勿論、隨緣の善根功德も、皆是偏に往生極樂の爲めと、締括りするのを回向發願心と申すのです、それが餘事回願、娑婆執着と振向け締括られたら、輪廻の邪業になる、謹むべきは願生の締括です、安心辟越すれば萬行徒らに施す、一念迷へ

ば凡夫、一念悟れば佛とは、蓋し此等のことを云ふのでせう、前に隨緣の善根も皆悉く、往生極樂へ締括りすることを一寸申しました、これは篤と合點しておかねはならぬ、隨緣の善とは緣にふれた善根です、此の緣にふれた善根が、お互處世上からは、唯一の菩薩行佛行であります。吾は彌陀佛、をこそ憑めはこて、餘佛餘菩薩を謗り、吾は念佛一行の專修なればこて、隨緣の善根を修するを嫌いなば、それは一向專修の行者でなくて、一向偏修の片輪者です、祖師上人は是等は法門を悪しく心得たるなりと彈呵されてあります。

日蓮上人が學業時代に鎌倉より房州の古里へ歸路に、大勢寄合ふて御釋迦樣の像を道の眞中へ投出して、手折り足折りして翫具にし樂んで居た、それを見て見兼ねた日蓮上人が汝等何故に釋迦像をかく毀つやと止めば皆一樣に申さく、吾等は彌陀一佛をこそ賴め釋尊如きは在て用なき

也、況や祖師上人は餘佛を拜するを雜行と誡め玉ふ、故にかくは致すなり、日蓮聞て痛く忿慨し、これより、念佛を輕視し遂に念佛無間と公然唱導するに至つたと傳ゐて居ります、此等の人も皆法問を惡しざまに心得た人である、何れの所にか諸佛諸菩薩を誹謗せよと說いてありますか第十八願には唯除五逆誹謗正法とあつて、返て念佛者でも餘佛餘菩薩、餘法餘經を誹謗すれば往生出來ぬと說いてあります。

念佛者の處世法

されば西方の行者と雖も、彌陀一佛、念佛一行の外にも、緣に應じ時に從つて隨緣の善根は進んで積まねばならぬ、觀音を拜し、地藏に參じ諸神諸祇に詣で、神社佛閣、靈山古蹟社會救濟の慈善事業、其他一切所有善根は緣に應じて隨喜し、又人をして隨喜せしめねばならぬ、是が念佛者の社會に於ける佛行でありますし、其の諸善萬行も皆惡く締括りて、是偏に願生淨土の爲とするが、回向心であります、此故に「昔し今我人の功德といふ程の物をは皆悉く捧げて往生せんと回向する也」と仰せられた、實に宏大な心である。

ですから、念佛者の處世法は或る古德の言の通り「根本をばかためて吹かる柳かな」で回向發願の心を以て極樂淨土の根本を堅め隨緣の娑婆の世風に吹れては、諸善萬行の柳となる、死して彌陀願王の赤子となり生きては國家の良民となる、ナント皆樣結構な身上ではありませんか、是れを眞實の後世者と申すのです。

譬へば桶の箍の如し

回向心を更に譬へば、桶の箍の如し箍は承知の通り、桶、樽、盥抔に綰ねてあるものです、若し此の箍がゆるんだり腐つたりして居たら、水は皆漏出して、桶や樽の用は致しません、少々は性の惡い古い盥であつても、箍さへ堅固に箍てあれは、それで盥の用はするのです、東京で糞取屋が、町の眞中で桶の箍がはづれて町人警官を閉口さしたことを、私

貞極上人と藩士

は實際見ておりましたが、箍はホンニ大切なものです、今も亦此の如し善根功德の桶や樽はあつたにせよ、回向心の箍が緩んだり腐つたりして居ては、往生の水は皆漏れて仕舞ふ、故に回向の箍は堅固な上に堅固であらねはならぬ、若しも此の回向の箍が、餘事回願と弛み、祈念祈禱、娑婆執着と腐つて來たら、卽座に往生淨土の水は漏り出して、大焦熱の渴苦を受けねはならぬ、謹むべきは願心の箍の腐る事である。

四休庵貞極上人は、淨土宗近古の高僧である、尾張德川侯の藩士某、二心なく上人に歸依して、常に安心起行の大要を承り、願生西方の行者であつた、一人娘に婿取らせて一家團欒の家庭其上娘が姙娠だから親の喜は一方ならず、一日も早くうい孫の顏見たしと、指折り數にて待つて居る。

悪い嫁可愛い孫をやたら產み

今は悪い嫁でない、可愛い娘の孫ですから、親達の喜悅喩へ樣のない程です、愈々お產になりますと、如何したものか非常の難產、產は生死の境目だ難產程氣毒な事はない、親の歎きは又一增、もしもの事あつては一大事、此上は貞極上人の御德に依つて、娘の難產を祈り申さんと、直に上人に此由請ひ奉れば、上人さあらぬ體にて、左樣かソレハソレとして、貴殿の腰の物一寸借用が願い度い　武「コレハ異な御賴み、所用に依つてはお貸し奉る、全體何に御使用なされますか」上人「イヤ少し前に信者より大根の供養あり、それを切らんが爲なり」これを聞いた武士怒髮逆立、眼は血走り、これは上人の言とも覺にず、大根ならば刄物にて切らるべし、武士の兩刀は左程の事の爲に用ゆるのでは厶らぬ、次第に依つては上人とてもお許し申さぬ」上人更に騷がせ給はず、それ程の道理を辨へ給ふ御貴殿なら、今貞極の勸むる念佛も亦爾り、此の他力の

念佛は、最悪最下を救はん爲に極善最上の要法を說き玉ふ也、浮ぶ瀨なき吾等が出離生死の爲にこそ念佛を申すなれ、安產の爲に使用すべき念佛に非ず、今貞極を請じて安產せしめんとす、貞極は藪醫者にあらず、念佛は產婆に非ず、請ふ速に去れと、武士平伏して云ふ、誠に爾かなりかばかりの道理を辨へぬ某ならねども、恩愛の情に惹かされて、遂に蕪言を呈す誠に以て慚愧の至り、かく申す內にも、娘は難產にて親子諸共に死したるやも計られず、此上は改めてお願申す、親子の滅罪生善臨終正念の爲に、お十念を授け下されと、上人心良く爾らば參らんとて、急ぎ其場に望み玉へば、哀や娘は難產にて虫の息も絕にんとす、上人至心に臨終正念往生極樂如來大悲哀愍護念南無阿彌陀佛と十念を授け玉ふに不思議なるかな十念終るや今迄の難產がスラリト變り、玉の樣な子を產落して一家安堵の想をなし、上人の偉德念佛の利益に感泣したと申す。

往生極樂の爲めの回向心

事です。

今も其通り、念佛は決して藪醫者や產婆の番頭や手代でない、それを苦しい時の神頼み、醫者產婆の手代に用ゆるのは、回向心の箍が緩み腐り出したのである、雷電のゴロ〳〵に恐れての念佛は、念佛が桑原の代理になり、腹痛の爲に念佛申せば、念佛がヘブリン散の藥になり、借金に苦み借金取の來ない爲めに念佛すれば、念佛が高利貸になる、此等は總て、回向心の箍の腐つた輩ぢや、念佛は夫等の爲に申すのでない、祖師上人の起請に云く。

唯往生極樂の爲には、南無阿彌陀佛と申して疑なく往生するうと思取りて申す外には別の仔細候はず。』

これが即ち回向心の行者である。

其三

振向ける心

前席に回向發願心は譬へば、溝の如し、締括の如し、箍の如し、と種々な方面からお話を致しました、今是れを總體纏めて一括して云へば、回向心とは「振向る心」を云ふのぢや、此振向る心が尊いのです、親一代の苦心の熱血は、可愛い子の爲に振向けらるゝ、一天萬乘の天子様が朝夕宸襟を悩し給ふ其御仁德は、日本六千萬の同胞に振向け給ふ、此の陛下の回向の御情けに依つて、お互が靜に暮しが出來るのです、今、阿彌陀如來の苦修練行、十劫正覺の功德をば、一切衆生に振向けて、代償の御修行あらせらる、此如來の回向心あればこそ、五濁亂漫のお互が順次の往生が出來るのです、魚心あれば水心とやら、既に大悲の親様より六字名號を振向け給へば、お互は如來大悲の勅命に縋りて、唯一途に念

隨喜善の回向

佛を稱へ參らせて極樂に往生せんと想ふを、回向發願心と申すのです。

さて、振向けるのが回向心なる事がお解りになりますれば、其次にはそれでは何物を振向るのかと云ふ事を篤と合點せねばならぬ、振向けるのには空では振向けられぬ、是に依て淨影大師も、挾善趣求說爲回向と仰せられて、善を振向けるのです、其善とは、申した念佛積んだ善根功德を振向けるのです、是を回向心と申します、同じ振向けるにしても、不幸の忰は親に拳固を振向け、女房怒れば殿を振向ける、邪見な子は親に心配を振向ける、此等は餘り感心の出來たふりむけでない。

若し自分に顧みて、振向くるべき善根功德のない時には、他人が善根作善を積むを見て、至心に隨喜するのです、此隨喜の功德を取纏めて、往生淨土と回向するのである、因果經に、若有貧窮人無財可布施見他修施時而生隨喜心隨喜福報與施等無異とある、佛法は實に有難い者

です、例せば、今日た寺の鐘が鳴る、説教があるさうな、隣の婆が嫁を連れて參た、彼の人も此人も皆聽聞に行つた、私も是非參りたいが、稼ぎはづせば食いはづす、働かにや食にぬ此身、お參り出來ぬこは情けない皆様は結構な身上、私は前世の宿業が重いこ見にる、其代りに仕事し乍ら念佛しませう、そして稱へた念佛を聞法結緣の糧に備へませうこ、仕事しながら念佛すれば、説教聽聞のその如く、功德宏大なりこ申すことです。

子守の追善

京都の或る富豪が、亡父の三回忌を三日間盛大に勤められた、隨喜の寺院、參詣の親類緣者、佛檀の莊嚴、何から何迄手落のなき盛大なる法要であつた、下女のお立が毎日洗ひ廻しに眼の眩む程で、夜の眼も眠られぬ位でした、斯様な時の膳部係の下働は隨分つらいものです、下女今しも當家秘藏の皿を洗ふて居る時に、毎日の疲れが出たのか、遂落して一枚破りました、主人は大變面相變へて怒り下女を打擲した、半年程前に子守に來たおみさが、何思ふたか其皿は私が破つたこ申出た、下女は驚きイエおミサ殿ではありません私です、子守は又イエ下女殿ではありません私です、私を打擲して下されこ云ふ、互に破つた罪に伏せんこしますから、主人思様全體誰れが本當に破つたのか、下女それは私に相違ありません、其證據は皿が何數に破れたか其の數を心得ております、子守殿は破つた本人でないから、定めし數に覺にがないでせうこ申出た、主人げにもやこ思ひけん、皿の破片を實驗するに、下女お立の言の如くでした、うれにしても不思議なるは子守、自ら犯した罪も、兎角の口述を設けて逃げるが人情、うれに自首して下女に代らんこするのは、下女に重い恩義でもあるのかこ、子守を呼寄せ聞尋ぬれば、子守おミサは涙を浮べ乍ら、御不審は尤もです、私は九州の生れ、一年前唯一人の慈母

に別れ、遂に流れ流れて當家の子守に置て頂だく事になりました、昨日より三日間亡父様の三回忌、誠に結構な御縁に遭して貰いました、此御法要に遇ひ乍ら、一年前の母を思ひますれば、丁度本日一周忌の正當でありますす、世が世であつたなら、力だけの追善佛事を營むのでお厶いますが、今は子守奉公の身上、亡き母に對して相濟まじと思ふ折もおり、下女お立殿の偉いお咎め、若し彼のお咎に私が代つてあげたら、其功德善根が、亡き母の後生菩提の幾分かの手向にもならんかと存じて、實は訴へ出た次第です、主人大に感じ、か程の志の者さへあるものを、我は佛事を營み乍ら忿怒をするは子守に對して愧かしと、下女の罪を許し、子守の母の追善に一卷の讀經を營んだと云ふ事です。

此等を名けて眞實の回向と云ふのです、若佛の慈眼より御照覽あらば富豪主人の追善よりも、子守おミサの殊勝な心掛を佛も哀れと御召すべ

し、これは昔の話ですが、子守おミサにも勝る殊勝な物語がある、夫は去處に一人淋しげに住む貧女がありました、丁度七月十五日、なき人の來る日とて、人みな父母先祖の爲に佛を供養す、是を魂祭りと申します貧女も祭らんとするに物はなし、たゞ綾の衣一つあり、其うらをときすて、小瓶の内に入れて、蓮葉を上に覆ひ、自ら携へて寺にゆき、是を佛に備へて打泣きて歸りぬ、寺僧見れは蓮葉の上に歌をかきつけてあつた

たてまつる蓮の上の露ばかり
　　これをあはれとみよの佛に

此歌特に哀れなり、か程の心根にて佛事を營みなば、假令形ばかりの讀經も、三世十方の佛達は哀れと御召して、納受し給ふなるべし、又僧も招待する施主の心意も解せずして、虛受信施に走らば、其報や恐るべしであります。

此等を總じて隨喜善の回向と申すのです、世間に於て同情程うるはしき心はない、今佛法修行に於て、隨喜善の心程やさしきうるはしいものはない、自分では佛道修行は出來ずとも、佛道修行は結構と隨喜するの心を持たせたい、自身には朝夕の勤行はせないにしても、行すれば結構なりとの中心の隨喜を持たせたい、本人は家事の都合上寺參りが出來ないにしても、寺參は結構と至心の隨喜心を持たせたい、受けた日課は懈怠勝にしても、日課は行せねばならぬの誠の隨喜を持たせたい、是隨喜心こそ、信心得脫の先驅である、佛性のきらめきである。

是を一軒の家に就て見まするに、朝夕勤行の役目は大概爺婆にあります、息子は身代盛にて世上の事に奔走し、朝夕の勤行抔は出來兼ますが兩親の勤行するを見て、ア、爺さん婆さんは良くお勤なさる、私も參らにやならぬのぢやが、仕事の爲に勤まらぬ、思へば濟まぬ事と云ふ隨喜

の心だけは持たせたい、是れが邪見な悋になれば、兩親の勤行するを見て、又しても木魚を叩き出した、大な聲で銅鳴り出した、高價な蠟燭、五色香、線香を駄澤山に燒き出した、彼のお勤の暇に、藁でも打て、草履の二三足なりとも造作して呉れたら、衣服のほころびでも縫ふて呉れたら、家の爲になるものを、エー忌ま〳〵しいと、兩親の後生を願ふをみて立腹する樣な子が出來たら如何しますか、隨喜の心、贊成の情、これがみ佛のあらはれでなくてなんでせう。

今日參詣の皆樣は大方子を持つ親である、其親として、我子に對して是非これだけの導をつけて置て貰いたい、それは、我子は皆稼ぎ盛の年ちやから、お寺參りも出來ますまい、朝夕先祖の佛檀に對して勤行も出來兼ませう、去れぐせめては二親のお寺參に贊成し、追善回向の佛事に隨喜して呉れるだけの佛法心は持たせたい、此佛法心をも持たせずば、

そりや親として子を思ふ眞實の情けがないのである、又此佛法心をも持たせる事が出來なかつたならば、親や先祖に對する追善回向抔は勤めて吳れる筈はない、眞實に我が年回、法要、追善回向が勤めて貰い度くば親の存命中に我子に佛法心を持たせて置く事です、此佛法心を隨喜善の功德と申すのであります、佛性此所に芽し、信心は此所に花咲くのであります、往生極樂の大果も、念佛稱名の大法もその源を探つてみますれば、いづれもみな佛法心隨喜心に根ざしておるのであります。

二種の回向

其四

曇鸞菩薩の往生論註に云く、回向に二種あり一者往想回向、二者還想回向也、その往想回向と云ふのは、今迄に述べて來た、極樂に往生せんの願生淨土の心を申すのです、その還想回向と云ふは、極樂往生以後、

往想回向中に還想回向を含む

此娑婆に歸り來て、一切衆生を救濟したいこの想を指すのです、善導大師も發願文に「彼の國に到り已て、六神通を得て、十方界に入りて、苦の衆生を救攝せん」と仰せられたは正しく還想回向の事であります、往想回向の自行で、還想回向は化他度生である。

それでは、還想回向の化他度生の宏業は、往生已後捨身他世の後からでなければ出來ぬかと云ふに、決して左うでない、往想回向中に自然と還想回向があるのです、極樂に往き度は、唯單に吾一人でない一切衆生も皆悉く往生をせしめたい、此の「人を往生せしめ度いの念か」即還想回向である、由是、勤行の終りに、願以此功德、平等施一切、同發菩提心、往生安樂國、の文を稱へる、毎日無心にて稱へて居れば、夫迄であるが、靜に此文の意を案ずるに、實に浩大な慈悲深き佛心である、假令、二三十分の勤行にしても、其功德を以て、願くは平等一切に施し、共に

安樂國に往生せんと振向けるのです、廣き世には、此有難き佛敎を、佛ども法ども、後生とも菩提とも知らずして、冥より冥に入る、氣毒の衆生が澤山ある、願くば夫等の人々も、御佛の加被護念、限りなき慈悲の光明に照されて、佛種を開發し、自他諸共に安樂淨生に往生せんと、回向をするのです、此の回向心程世に目出度き、うるはしき心はあるまい是程結構なうつくしき回向心を、不心得の人は、他人に回向を施して仕舞へば、肝心の本人の功德が空虛になる樣に考へ居る人が澤山ある。

佛の鼻薫ること

砂石集八に「佛之鼻薫事」がある、或尼公、金色の立像の阿彌陀佛を美麗に造奉て、持佛堂に入れて其本尊となし、仰て恭敬供養しけるが、此尼公事にふれて、かぎりがましく、きびしく慳貪なりけるまゝに、香を燒くに、餘の佛あまたおはする持佛堂なれば、香の煙散りて、我佛はあたり付き給はじと思て、香盤の蓋に、細き竹のつゝをねぢ入れて、片端をば佛の鼻の穴にねぢ入れて、聊かも香の煙の散らぬ樣にして、香をたく程に、泥佛の鼻漆をぬりたる樣にて、金色も見にず、此尼公逝去して、女人に生れ貌形はよかりけれども、鼻の穴は黑くして墨の如し、彼尼公生れたる由、人の夢に見にたりとあります。

又、和州の山里に百姓あり、草堂を造りて、供養の導師に、西大寺の思圓房の上人を請す、願文の廻向の詞を聞て、此堂は故婆にて候し者の爲に、兎角に勵みて造りて候、法界衆生に御回向候は、婆は萱一すじにも當りもつき候はじと覺候、唯婆が爲とばかりあそばされ候へと申すに功德は回向すれば愈々大にして失す事なし、聖靈の功德大なるべしと、細まやかに敎へられければ、目出度事にて候けり、但し、隣に候ふ三郎檢校と申す者ばかりは、除かせ給へ候へと申す、上人之を懇に諭すども遂に聞入れずとなん、とあります。

施して無くなるものにあらず

此等の物語は、皆回向心の不心得から來るので、今日在座の銘々にも事によればか樣な人がないとも云はれまい、凡て物は施して無くなる物は一物もない、それを施せば減る樣に思ふから、前の砂石集の振舞になる十錢の金を五錢だけ施せば、五錢無くなつた樣なものぢやが、眼に見にぬ處で五錢已上の德となつて存在して居る、されど眼に見にぬから人々はかろがろしく思ふ、それが全く誤りである、眼に見にぬからとて內證で惡事を働けば、終りには眼に見ゆる犯罪と現はれる、眼に見にぬ陰德を積めば、眼に見ゆる顯德となる、總じて神や佛の道は眼には見にぬ、而れども此道に外れぬ樣、違はない樣、背かぬ樣にして行く所に、誠の道が存するのです、明治天皇の御歌に「眼に見にぬ神の心に通ふこそ人の心の誠なりけれ」況んや眼に見にて施せば施す程增加する物がある、例へば蠟燭の火の樣なものです、一本の蠟燭の火を、轉々十本二十本と轉火したとて、根本の蠟燭の火が減退して無くなる筈はない、今も其如く、一善一功德も、如法眞實に法界衆生に回向すれば、愈々廣大の功德となる、思へば回向心は宏大甚深なものです、皆樣是を承つて如何なる感が湧きます、御互の每日の勤行は實に不如法なもので「歸命頂禮嫌念佛、口かゐだるく眼は澁く、體はすくみ氣はつまり、欠坤ダラ〳〵線香に眼をつくるばかりなり」か樣な心持が勤行の時の有樣です、此の不如法な勤行でも、願以此功德平等施と、法界衆生に回向すれば、それが一切群生の、生死解脫の善本になるのかと思へば、身にあまる悅ではありませんか。

佛說觀無量壽經に、佛心者大悲慈是とある。

佛とは何を岩間のこけむしろ
慈悲より外にしくものはなし

此の慈悲に就て、衆生縁の慈悲、法縁の慈悲、無縁の大慈悲の區別のお說もありますが、か樣な解釋風のお話は暫く別として、慈悲と云ふものには知不知の別はない、見す知らずの人でも、道傍に倒れて居れば起して上げる氣になる赤子が井に陷んとすれば飛寄りで助くる氣になる、これが本來の慈悲の性質です、慈悲の性質は無差別にある、强て差別ありとすれば、罪ある身をより多く慈む慈悲の差別である。

慈悲の眼に惡しと思ふ者はなし
罪ある身こそなほ哀れなり
めぐまんと思ふ心は廣けれど
はぐゝむ袖の狹くもあるかな

此平等无差別の慈悲は、願以此功德平等施一切の、怨親平等の法界回向に歸着する、此法界回向以上の慈悲心はあるまい、されば眞實西方の行者は、無縁の大慈悲を身に行ふ、佛心の修行者であります、何んと有難い身柄ではありませんか。

かく法界平等に回向しますれば、回向された一切衆生の方で、同一に其御利益を受け、功德を蒙るかと云ふに、必ずしもそうでない、各々其縁に應じて受る益が異ると申す事です、父母は我れに最も深かければ、兄弟より多く益を得け、妻子は我れに因縁厚ければ親類縁者より多く益を受く、親類は縁あれば他人より多くの益を蒙る、法華經に、佛平等說、如一味雨、隨衆生性習受不同、と說き玉ふてある。

おしなべて一味の雨は注げども
受くる草木は各が樣々

此等の善根功德も皆悉く取り纏めて、往生安樂と振向けるのを、回向發願心とは申也。